

なが た ふ にゅう かま あと  
市原市 永田・不入窯跡

1989

財団法人 市原市文化財センター



## 序 文

房総半島東京湾岸の中央部に位置する市原市は、昨年話題を集めた「王賜」銘鉄剣の出土あるいは上総国分僧・尼寺の建立に代表されるように、市内各所に埋蔵文化財が豊富に認められるなど、豊かな自然環境を背景に永く人々に愛されてきた地であります。

一方、首都圏に位置するといった地理的環境から、京葉工業地帯の中核都市として宅地造成、道路網の整備あるいはゴルフ場の建設など地域開発も活発化しております。その結果、「開発と文化財の保護」との調和を図る必要性が高まっております。

今回の調査は、市原市久保地区の県営圃場整備事業に伴う、永田・不入窯跡の確認調査であり、農林省及び文化庁の国庫補助事業として、農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について、関係機関のご協力をいただいて実施しました。

調査の結果、永田地区の2箇所において、新たに窯跡の存在が確認されるなど多大の成果を得たものであります。調査成果をまとめた本報告書が、今後の文化財保護活用の一助として役立つことができれば幸いと存じます。

最後に、調査にあたり、千葉県教育庁文化課、千葉縣市原土地改良事務所、市原市加茂土地改良区等の方々にご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

平成元年3月

市原市教育委員会  
教育長 星 野 一 郎

## 例 言

1. 本書は、千葉縣市原市不入地先における県営圃場整備事業加茂地区土地改良に伴い、事業に先行して遺跡の状況等を把握するために実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書に所収する内容は、千葉縣市原市不入 574 番地ほかに所在する「永田・不入窯跡」遺跡についての報告書である。
3. 発掘調査は、千葉縣市原市土地改良事務所ならびに市原市の委託を受け、千葉県教育委員会・市原市教育委員会の指導のもと財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 調査対象面積は、29,000 m<sup>2</sup>であり、10%にあたる 2,900 m<sup>2</sup>について確認調査を実施した。
5. 調査は、対象面積 29,000 m<sup>2</sup>のうち 21,750 m<sup>2</sup>を農林水産省の補助を受けた千葉縣市原市土地改良事務所が、残り 7,250 m<sup>2</sup>を文化庁補助を受けた市原市が按分し、それぞれ費用を負担した。負担割合は、農林側 75%、文化庁側 25%である。
6. 確認調査・整備作業は、下記のとおり行った。  
 確認調査 昭和 61 年 12 月 1 日～昭和 62 年 3 月 31 日 担当 田所 真  
 昭和 62 年 11 月 1 日～昭和 63 年 3 月 31 日 担当 石田広美・田所 真  
 整理作業 昭和 63 年 6 月 1 日～平成元年 3 月 31 日 担当 宮本敬一・田所 真
7. 本書の執筆、作成は田所 真が行ったが、写真撮影については石田広美・田所 真で行っている。  
 また、調査に至る経緯については、市原市教育委員会文化課に原稿をお願いした。
8. 調査による出土遺物及び記録類は、市原市文化財センターで保管している。
9. 市原市文化財センター調査コードは、(セ 51)である。

## 市原市文化財センター組織表

### 昭和 61 年度(確認調査)

役 員	調査課
理 事 長 星 野 一 郎 (教育委員会教育長)	課 長 清 藤 一 順
副理事長 横 濱 辰 夫 (教育委員会教育指導部長)	主 幹 石 田 広 美
常務理事 岩 見 一 民 (専任)	主 幹 山 口 直 樹
理 事 滝 口 宏 (早稲田大学名誉教授)	主任調査研究員 宮 本 敬 一
理 事 寺 村 光 晴 (和洋女子大学教授)	主任調査研究員 米 田 耕 之 助
理 事 海 上 信 久 (姉崎神社宮司)	調 査 研 究 員 田 中 清 美
理 事 松 崎 良 一 (市企画部長)	調 査 研 究 員 浅 利 幸 一
理 事 斎 藤 栄 亮 (市総務部長)	調 査 研 究 員 大 村 直 敏
理 事 地 引 希 壹 (市都市部長)	調 査 研 究 員 近 藤 敏 男
理 事 松 下 隆 (市総務部財政課長)	調 査 研 究 員 高 橋 康 男
監 事 白 鳥 一 夫 (市会計課長)	調 査 研 究 員 田 所 真 紀
監 事 斎 藤 崇 雄 (教育委員会総務課長)	調 査 研 究 員 木 對 和 紀
職 員	調 査 研 究 員 (嘱 託) 田 中 新 史
庶務課	調 査 研 究 員 (嘱 託) 半 田 堅 三
課 長 田 丸 萬 富	調 査 研 究 員 (嘱 託) 鈴 木 英 啓
主 事 補 大 鐘 光 江	事 務 員 (嘱 託) 高 浦 貞 子
事 務 員 (嘱 託) 秋 田 晴 美	事 務 員 (嘱 託) 長 谷 川 い づ み
事 務 員 (嘱 託) 石 渡 あ ゆ み	

昭和 62 年度(確認調査)

役 員

理事長	星野一郎	(教育委員会教育長)	調査課				
副理事長	大野	皎(教育委員会教育指導部長)	課	長	清藤	一順	
常務理事	岩見	一民(専任)	主	幹	石田	広美	
理事	滝口	宏(早稲田大学名誉教授)	主	幹	加藤	正信	
理事	寺村	光晴(和洋女子大学教授)	主任	調査研究員	宮本	敬一	
理事	海上	信久(姉崎神社宮司)	主任	調査研究員	米田	耕之助	
理事	飯山	英雄(市企画部長)	調	査	研	究	員
理事	宮崎	芳雄(市総務部長)	調	査	研	究	員
理事	地引	希壹(市都市部長)	調	査	研	究	員
理事	安藤	隆一(市総務部財政課長)	調	査	研	究	員
監事	元吉	末喜(市会計課長)	調	査	研	究	員
監事	斎藤	崇雄(教育委員会総務課長)	調	査	研	究	員

職 員

庶務課			調査研究員(嘱託)		木	對	和紀
課	長	田丸萬富	調査研究員(嘱託)		田	中	新史
主事	補	大鐘光江	事務員(嘱託)		半	田	堅三子
事務員(嘱託)		秋田晴美	調査補助員(嘱託)		高	浦	貞子
事務員(嘱託)		石渡あゆみ			田	中	裕子

昭和 63 年度(整理)

役 員

理事長	星野一郎	(教育委員会教育長)	調査課				
副理事長	大野	義規(教育委員会教育指導部長)	課	長	石田	広美	
常務理事	須田	昇三(専任)	主	幹	加藤	正信	
理事	滝口	宏(早稲田大学名誉教授)	主任	調査研究員	宮本	敬一	
理事	寺村	光晴(和洋女子大学教授)	主任	調査研究員	田中	清美	
理事	海上	信久(姉崎神社宮司)	調	査	研	究	員
理事	根本	正夫(市企画部長)	調	査	研	究	員
理事	宮崎	芳雄(市総務部長)	調	査	研	究	員
理事	地引	希壹(市都市部長)	調	査	研	究	員
理事	安藤	隆一(市総務部財政課長)	調	査	研	究	員
監事	元吉	末喜(市会計課長)	調	査	研	究	員
監事	河野	徳三(教育委員会総務課長)	調	査	研	究	員

職 員

庶務課			事務員(嘱託)		半	田	堅三子
課	長	田丸萬富	事務員(嘱託)		高	浦	貞子
主事	補	大鐘光江			田	中	裕子
事務員(嘱託)		秋田晴美					
事務員(嘱託)		石渡あゆみ					

## 本文目次

序 文  
例 言  
調査組織

I	調査に至る経緯	1
II	永田・不入窯跡群の位置と地理的環境	2
III	永田・不入窯跡群周辺の考古学的環境	6
IV	永田・不入窯跡群の調査略歴	9
V	調査の方法	10
	1. 確認調査の方法	10
	2. 整理作業の方法	10
VI	調査成果の概要	15
VII	第1トレンチ区の調査	16
VIII	第3トレンチ区の調査	18
IX	G II d - 79 区表採の遺物について	20
X	DIV c - 26 区の調査	22
XI	その他の遺構・遺物	24
XII	おわりに	31

## 挿 図 目 次

第1図	永田・不入窯跡群の位置と古墳(群)の分布	3
第2図	永田・不入窯跡群と養老川旧流路(想定)	5
第3図	永田・不入窯跡群周辺の地形と関連遺跡	7
第4図	確認調査の対象範囲とグリッドの設定方法	11
第5図	永田・不入窯跡群調査地点配置図(1)	12
第6図	永田・不入窯跡群調査地点配置図(2)	13
第7図	永田・不入窯跡群調査地点配置図(3)	14
第8図	第1トレンチ調査区の地形・出土遺物	17
第9図	第3トレンチ調査区の地形・出土遺物	19
第10図	第3トレンチ・G II d - 79 区出土遺物	21
第11図	DIV c - 26 区の位置と出土遺物	23
第12図	B V w - 26 区・B V s - 81 区及び永田窯跡群出土遺物	25

## 図 版 目 次

- 図版 1 1. 永田・不入窯跡群遠景(東側から)  
2. 永田・不入窯跡群遠景(北側から)  
3. 土層堆積状況  
4. 永田窯跡No.1 トレンチ内遺物出土状況  
5. DIV c - 26 区出土遺物
- 図版 2 6. 永田・不入窯跡群周辺の地形(東側から)  
7. 永田窯跡No.1 トレンチ  
8. 永田窯跡No.3 トレンチ
- 図版 3 9. 永田・不入窯跡群遠景(北側から)  
10. 永田・不入窯跡群遠景(フジヤマから)  
11. 不入窯跡群遠景(対岸より)  
12. 不入窯跡群近景(西側から)  
13. 永田窯跡群遠景  
14. 永田窯跡群近景  
15. 窯跡群の位置関係(東側から)
- 図版 4 16. 永田窯跡群No.1 トレンチ遠景  
17. 永田窯跡群No.1 トレンチ遺物出土状況(西側)  
18. 永田窯跡群No.1 トレンチ遺物出土状況(中央)  
19. 永田窯跡群No.1 トレンチ遺物出土状況(東側)  
20. 永田窯跡群No.1 トレンチ物原下面検出状況(1)  
21. 永田窯跡群No.1 トレンチ物原下面検出状況(2)  
22. 遺物堆積状況  
23. 遺物堆積状況(近景)
- 図版 5 24. 永田窯跡群No.3 トレンチ近景(西側)  
25. 永田窯跡群No.3 トレンチ近景(中央)  
26. 永田窯跡群No.3 トレンチ近景(東側)  
27. 永田窯跡群No.3 トレンチ遺物出土状況(1)  
28. 永田窯跡群No.3 トレンチ遺物出土状況(2)  
29. 永田窯跡群No.3 トレンチ遺物出土状況(3)  
30. 遺物堆積面土層観察  
31. 永田窯跡群No.3 トレンチ物原下面検出状況
- 図版 6 32. E II s - 35 区拡張調査区溝状遺構検出状況  
33. E II s - 35 区土層  
34. CIV区~DIV区調査状況  
35. DIV c - 26 区遺物出土状況  
36. BV区・BVI区調査状況(東側上空から)  
37. BVw - 55 区溝状遺構検出状況(北から)  
38. BVs - 81 区調査状況(東から)  
39. BVt - 71 区調査状況(西から)
- 図版 7 40. F II b - 51 区出土  
41. F II b - 51 区出土  
42. DIV c - 26 区出土(第 11 図 49)

43. DIV c - 26 区出土(第 11 図 50 )  
 44. DIV c - 26 区出土(第 11 図 53 )  
 45. DIV c - 26 区出土(第 11 図 52 )  
 46. DIV c - 26 区出土(第 11 図 57 )  
 47. DIV c - 26 区出土(第 11 図 58 )  
**図版 8** 48. DIV c - 26 区出土(第 11 図 59 )  
 49. DIV c - 26 区出土(第 11 図 51 )  
 50. DIV c - 26 区出土(第 11 図 56 )  
 51. DIV c - 26 区出土(第 11 図 62 )  
 52. DIV c - 26 区出土(第 11 図 60 )  
 53. DIV c - 26 区出土(第 11 図 63 )  
 54. H II c - 83 区出土  
 55. H II c - 83 区出土  
**図版 9** 56. DIV c - 26 区出土(第 11 図 66 )  
 57. DIV c - 26 区出土(第 11 図 67 )  
 58. DIV c - 26 区出土  
 59. G II d - 79 区表採(永田 10 号窯)  
 60. DIV c - 26 区出土(第 11 図 68 )  
 61. 左:No. 3 トレンチ調査区出土  
       中央:DIV y - 42 区出土  
       右:DIV y - 34 区出土  
 62. DIV c - 26 区出土(第 11 図 64 )  
 63. DIV c - 26 区出土(第 11 図 65 )  
**図版 10** 64. No. 1 トレンチ調査区出土  
 65. H II c - 83 区出土  
 66. 同上(口縁部)  
 67. H II c - 56 区・H II g - 19 区出土  
 68. EIV d - 27 区出土(No. 1 トレンチ内)  
 69. H II c - 53 区出土  
**図版 11** 70. No. 3 トレンチ調査区出土  
 71. DIV y - 27 区出土  
 72. No. 1 トレンチ調査区出土  
 73. DIV y - 43 区出土  
 74. 上段左:DIV y - 61 区出土  
       上段右:DIV y - 43 区出土  
       下段左:DIV y - 43 区出土  
       下段右:No. 2 トレンチ調査区出土  
 75. 上段左:No. 1 トレンチ調査区出土  
       上段右:No. 3 トレンチ調査区出土  
       下段左:No. 2 トレンチ調査区出土  
       下段右:G II x - 18 区表採  
 76. G II j - 41 区表採  
 77. No. 2 トレンチ調査区出土( 75 . 下段左裏面)



## I 調査に至る経緯

市原市加茂地区における県営圃場整備事業にさきがけ、昭和55年5月15日付けで市原市長より事業地域の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が、千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長あてに提出された。これを受けて、現地踏査等を行った結果、昭和55年7月25日付けで千葉県教育委員会より須恵器窯跡が所在する旨の回答を得た。

この後、地元土地改良区、市原土地改良事務所、高滝ダム周辺整備対策室、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会は、工事と遺跡の保存方法等について協議を行った。その結果、当初からその所在のわかっている地区は、その範囲を見極めたうえで保存とし、その他の部分については確認調査を実施し、窯跡の所在する部分を明らかにし、その取り扱い等について検討することとした。

調査は対象面積29,000㎡の確認調査で、昭和61年、62年の2ヶ年にわたり実施した。

(市原市教育委員会文化課)



## II 永田・不入窯跡群の位置と地理的環境

永田・不入須恵器窯跡は、千葉県市原市不入字下新谷 574 番地他に所在している。

この地は、昭和 39 年以来、養老川の自然短絡によってできた曲流短絡地形として注目されてきている所であり、当遺跡の発見及び紹介も、この時点のことであった。〔文献 02〕

須恵器窯の立地・基数等については、昭和 49 年の國土館大学による発掘調査以来、今回までに三次にわたる発掘調査が行われており、おおむね明らかとなってきた。これらについては、次節以降に学史的な整理をも踏まえて報告することとするが、本節では、これに先立って、当地の自然短絡地形と遺跡との関係を中心に、その立地環境を見ておくこととしたい。

### I) 市原市の地理的な景観

市原市は、房総半島の西北部に位置し、東京湾の八幡宿～姉崎の海岸線より、内陸へ延びて養老溪谷に至る地域であり、古代にあつては上総國市原郡及び海上郡の所在した地域であった。

市域の地形は、丘陵・台地・河岸段丘・沖積低地などに分けることができる。

丘陵は権現森－高星山－音信山を結ぶ線より南東側に広がっており、北－北西の単斜構造を有している。上総丘陵である。これに対して、台地はこれらの山々の北西側に広く分布している。浅い谷を樹脂状に発達させた下総台地である<sup>註(1)</sup>。

河岸段丘及び沖積低地は、これらの丘陵・台地を開析して流れる河川活動によって形成されたものであり、市域のほぼ中央に養老川が貫流している。清澄山系を源流とするこの川は、よく蛇行して北上し、東京湾へと注いでいる。流域には、数多くのメアンダーが残されている。

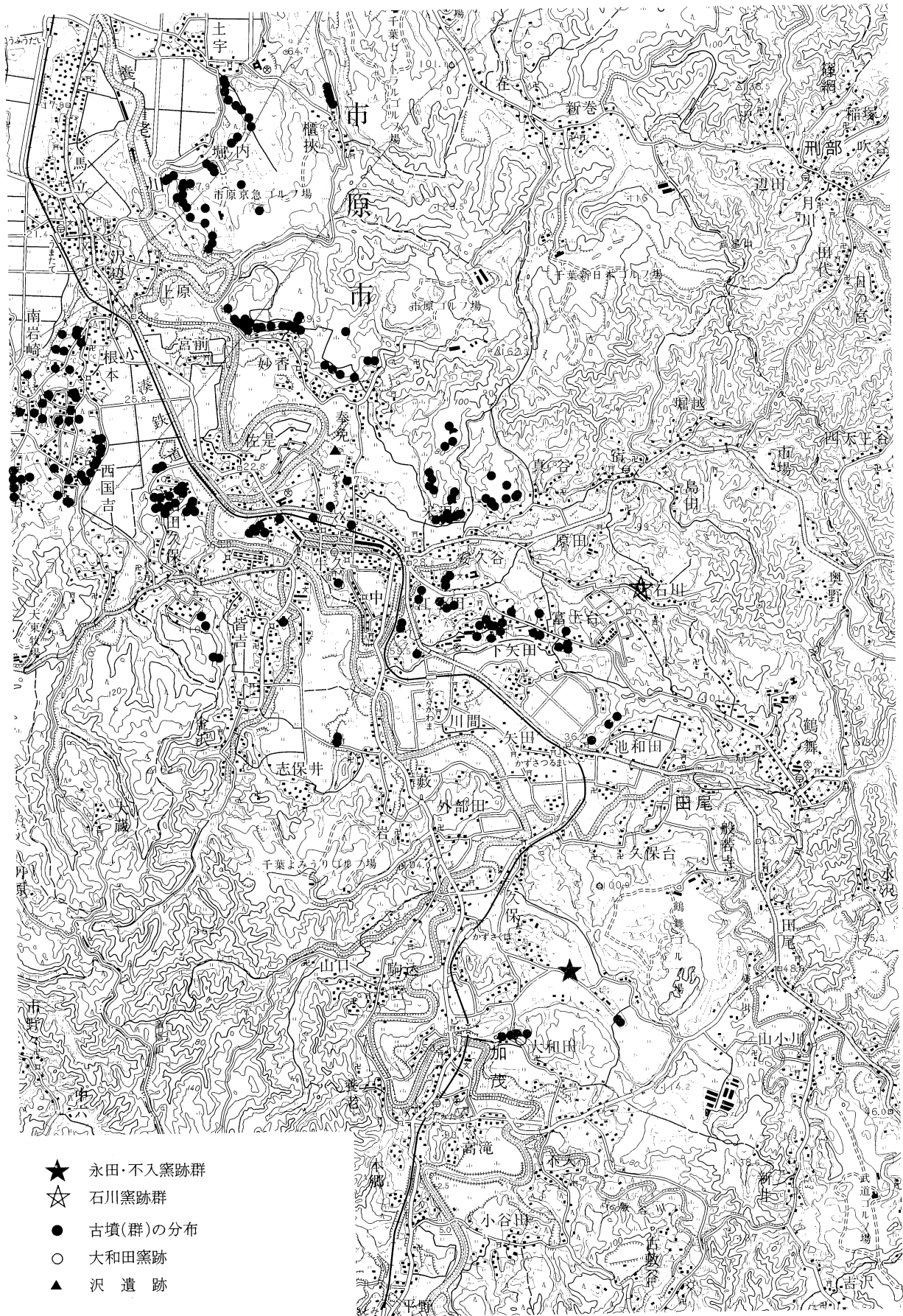
上流域の村むらと下流域の街や村との交易が、永いこと河川交通によって行われてきたことは言うまでもない。中流域などでは、曲流の著しく発達した河川を人工的に短絡させて、可耕地の確保に努めることも行われた。所謂「川廻し」である。

### II) 永田・不入窯の立地と地理的な景観

さて、養老川の中流域、いまだ上総丘陵の山懐に抱かれたところに、「久保」と呼ばれる 50 戸ばかりの集落がある。東京湾岸から養老川を遡ること 25 km ほどのところである。

この集落は、古い時期の自然短絡によってできた地理的景観を良く残しており、旧養老川の流路には水田が営まれている。曲流部によって囲まれた微高地は、しばしば「島」「中島」などと呼ばれるが、久保の中島は短絡部に近い「久留里Ⅱ面」の河岸段丘面と、曲流部の先端へ向かって鶴首状に延びる「久留里Ⅱ面」の河岸段丘面とによって構成されている<sup>註(2)</sup>。これらの河岸段丘面は、いずれも、新期関東ローム層を欠くものであって、殊に久保の「久留里Ⅱ面」は、旧養老川の曲流作用によって幅が極端に狭くなっており、表土の流失が著しい。この段丘面に民家が建てられ、或いは畠地として耕作が行われるようになったのは、近年のことのようである。現在でも畠地耕作は秋口から冬場にかけてをピークとしている。盛夏には表土が浅く、根枯れして収穫が見込めないからだという。地味の瘦せた、生産性の低い段丘面である。

永田・不入窯は、この「久留里Ⅱ面」の河川段丘の斜面部に築窯されている。この立地については当遺跡の昭和 59 年度調査において、以下のような理解がなされている。やや長くなるが、今回の調査成果に直接かかわることでもあるので、引用しておくこととしたい。



- ★ 永田・不入窯跡群
- ☆ 石川窯跡群
- 古墳(群)の分布
- 大和田窯跡
- ▲ 沢遺跡

第1図 永田・不入窯跡群の位置と古墳(群)の分布

「永田窯跡付近は流路が約 90° 方向を変える位置に造られており、立地する斜面は浸食の著しい「攻撃斜面」となっている。つまり対岸から緩やかな階段状に下ってきた水田面が斜面直下で最も低くなり、斜面は比較的比高差があつて急な勾配で立ち上がっている。また不入窯跡は、永田窯跡側からの流れが 180° 方向を換えてからの「滑走斜面」側に造られており、水田面は、今回の調査区(不入窯跡前面)を最高位として対岸に向かって緩やかに傾斜している。ただ不入窯跡が立地する部分は小規模な曲流の外側にもあたり、付近の斜面と比べ、比高差があり、勾配も急なものとなっている。

この様に見ていくと、両窯跡の立地は比高差があつて、勾配も比較的急である点で共通している。また、こうした地形は永田段丘においては限られており、窯の造設にあたっては地形を選んで行われているものと思われる。このことは不入窯が日当の著しく悪い北東斜面側にあえて造られていることの理由ともなる。」「( )内は加筆である。〔文献 29〕

さて、永田・不入窯の立地について、現段階でその特徴を纏めるならば、久保の短絡地形にあつて鶴首状に延びる河岸段丘面の斜面部にのみ築窯されていると指摘することができる。すなわち、今回の二ヶ年度にわたる確認調査の結果からみるならば、窯跡の分布や灰原などの広がり、調査区域内でひとつの纏まりを示しており、調査区域の隣接地に延びていく可能性を見出すことができない。このことは、調査期間中を通じてたびたび実施した周辺部の踏査でも同様であった。踏査では当地の河岸段丘面及び斜面と旧養老川流路対岸の斜面縁辺部について表採活動を繰り返したが、永田窯上面で周知されている「永田遺跡」周辺と、不入窯対岸の一地点で数片の須恵器片を表採し得たにすぎなかった。不入窯の対岸で表採された須恵器片は少量であり、調査後の工事中にも踏査を重ねたが窯跡と考えられる痕跡は見出せなかった。

以上のことからみて、周知される永田・不入窯跡の範囲は、ひとつの「群」として認識することができよう。

それでは、ひとつの「群」として認識される永田・不入窯跡の前面に広がる曲流短絡地形は、いつ形成されたのであろうか。

当地域で出土あるいは表採される遺物のうちで、最も古いと考えられるものは、縄文時代早期の尖底土器である。資料が断片的であるため、遺跡の広がりや時期幅・変遷などを明らかにし得るまでには至っていない。しかし、今回の調査では、旧流路の河床面に近い層から尖底部が出土しており、この時期には、養老川本流が現在の短絡地形曲流部を流れていたものと推測することができよう。「久留里Ⅱ面」の形成期を縄文時代に求めるとして矛盾していない。

旧河道面の低位層において出土する遺物片のうちで、最も新しい時期と考えられるものは、鬼高期後半の所産と考えられるものである。この時期の遺物については、河岸段丘面上でも広く表採されており、短絡以前の景観として復原することができよう。

これに対して、永田・不入窯跡の物原層は、旧河道面の上位層において平行堆積をみせており、短絡後に操業されていることが明らかである。(第 9 図セクション図等参照)

以上のことからみて、当地の曲流短絡地形は、古墳時代後期集落の終熄後、永田・不入窯の開窯までの間のことと考えられる。しかし短絡をもって河川活動の終熄期を規定することは難しい。今回の調査でも、灰原・物原は河川の氾濫層によって被覆されていることが明らかとなっている。生産性の低い不安定な土地に築窯しているとするならば、それなりの要因を考えるべきであろう。



第2図 永田・不入窯跡群と養老川旧流路(想定)

### Ⅲ 永田・不入窯跡群周辺の考古学的環境

養老川流域における遺跡の分布は、下流域に密であって、中流域以南に粗である。特に古墳時代以降の遺跡では、この傾向が顕著に認められており、第1図に示した古墳群の分布をみても、このことは明らかであろう。この様な遺跡分布の粗密は、養老川本流と平蔵川との合流点あたりを境としているのであるが、これは前章で述べた上総丘陵地域と下総台地地域との差でもあり、また、養老川流域における水田可耕地面積の差のあらわれでもありと考えられる。

永田・不入窯跡群は、このような遺跡立地のあり方の中で、粗にあたる上総丘陵地域に敢えて開窯されている。このような中であって、永田・不入窯跡群は、律令的土器生産遺跡のひとつとして、上総国分二寺に代表される寺院・官衙等へその製品を供給しているのであって、その選地要因をどこに求め得るかは、十分に検討されるべき課題であろう。

さて、永田・不入窯跡群の立地する市原市加茂地区では、当遺跡および当遺跡に近隣する永田遺跡・大和田遺跡・番後台遺跡<sup>註(3)</sup>・神明台遺跡<sup>註(4)</sup>の5遺跡と、さらに上流の平野に所在する皿郷田茂遺跡<sup>註(5)</sup>とによって、調査が実施されてきている。また、加茂地区に北隣する南総地区では、上総牛久を中心として江子田金環塚古墳<sup>註(6)</sup>・江古田上原台遺跡<sup>註(7)</sup>・石川窯跡<sup>(文献10)</sup>・奉免沢遺跡<sup>註(8)</sup>・奉免上原台遺跡などで調査が実施されてきており、不十分なながらも資料の蓄積がなされてきている。以下、これらの調査成果などを参考にしながら、永田・不入窯開窯の選地要因を模索しておくこととしたい。

須恵器窯の開窯にあたっては、須恵器の作成はもとより、窯窯の築窯技術等を有する技術者(以下須恵器工人と呼称する)の存在を想定しなければならない。律令期における手工業生産者集団の実体殊に土器生産に携る集団の実体については、いまだ不明瞭であって多くを語り得ないが、永田・不入窯跡の場合についても同様であって、当地の須恵器工人が単に須恵器生産のみに従事する専門工人であったか否か、或いは、この工人(達)が組織的集団をどのような形で形成していたのかなどといった問題について、未解決な部分が多く、想像の域を脱するには至っていない。

しかし、この様な五里霧中の中にあっても、上総國西北部にあたる市原郡・海上郡の当該期の土器様相から見るならば、永田・不入窯の須恵器生産は、前代の須恵器生産にあたる大和田窯跡の須恵器

〔永田・不入窯跡群周辺の遺跡〕(文献No.は巻末文献一覧の番号)

1. (a～c)永田・不入窯跡群 ……須恵器窯跡群。文献No.02・03・05・29
  2. 石川窯跡群 ……須恵器窯跡群・窖窯3基。文献No.10・24・47
  3. 大和田遺跡 ……古墳群。横穴群。須恵器窯跡・窖窯1基。文献No.45
  4. 宮原横穴群 ……横穴群。3基。
  5. 番後台遺跡 ……集落(縄文時代～古墳時代)ほか。一部調査。
  6. 不入遺跡 ……弥生式土器・土師器等散布地。「永田遺跡」として一部調査。
  7. 山小川遺跡 ……縄文式土器・土師器・鉄滓等散布地。
  8. 池和田城横穴群 ……横穴群。3器。
  9. 池和田横穴群 ……横穴群。3器。
  10. 江古田上原台遺跡 ……集落・方形周溝墓ほか。「南総中学遺跡」として一部調査。
- ▲沢遺跡 ……集落ほか。一部調査。(位置は第1図参照)



第3図 永田・不入窯跡群周辺の地形と関連遺跡

生産体制とは、一応切り離して考えるべきものであって、開窯の時点で他国から須恵器工人が移入されてきたであろうことは、想像に難くない。

それでは、須恵器工人の移入にあたって、遺跡の分布密度から言えば粗にあたる上総丘陵地帯内の久保に、何故開窯したのであろうか。選定の要因としては、須恵器工人主体の要因と、上総国内の事情とも言うべき外的要因とが考えられるであろう。

須恵器窯開窯地の選定にあたっては、窯業上の立地条件を満たし得ることが大前提となることは、言うまでもない。上総國西北部にあたる市原郡・海上郡の窯業関係遺跡の中から、須恵器窯跡と屋瓦窯跡との分布を取り上げて、窯業上の立地条件を瞥見した場合、上総丘陵地帯に立地するものは、前代の大和田窯跡と当遺跡の二ヶ所が知られているのみであって、永田・不入窯跡群と時期を共有しつつも後続すると考えられている石川窯跡や上総國分二寺屋瓦を生産している南田瓦窯跡・神門瓦窯跡・祇園原瓦窯跡などは、いずれも下総台地地帯に築窯されている。また、同じ上総國內にあつて開窯時には上総國分寺と強い関係にあることが示摘されている山辺郡の瓦陶窯跡群南河原坂第4遺跡<sup>(文献26)</sup>も下総台地地帯に築窯されている。また、南田瓦窯跡および南河原坂第4遺跡では、近接地に粘土採掘跡の存在も知られており、陶土として下末吉層の粘性土が利用されていることも明らかとなつてきている。

このように見てくると、下総台地地帯においても瓦陶の生産が可能であるという意味において、窯業上の立地条件として上総丘陵地帯を窯業適地として特別視することは困難であるように思われる。開窯地の選定にあたっては、別の観点による模索も必要であろう。

そこで次に、当地域の考古学的環境を、前代にあたる古墳時代以降についてみておくこととしたい。

まず、永田・不入窯跡群の西方にあたる番後台遺跡の調査成果からみていくと、番後台遺跡では、縄文時代中期の住居跡1軒、弥生時代後期の住居跡30軒・古墳時代前半の住居跡79軒・古墳時代後半の住居跡20軒などが調査されている。これに対し、奈良時代以降のものは皆無であった。

この遺跡の調査成果は、当該地域の史的変遷の一端をよく反影しているものと考えられる。すなわち、弥生時代後期以来の集落は、古墳時代前半の五領期に生彩を極め、古墳時代後半の鬼高期に終熄を迎える。このことは、平野の皿郷田茂遺跡に五領期の墳墓が造営されていることや、不入遺跡の散布資料に弥生時代後期以降、五領期及び鬼高期までのものが広い範囲で観られることから、窺えるところである。しかし、分布踏査等で墳丘の確認できる古墳群や横穴群の分布南限が、第1図および第3図に示されるとおりであつて、その南限地域にあつていることも事実である。当地域の豪族層による大規模な展開は見込むことができない。一方、養老川流域の大型古墳による変遷の概観では、前期には下流域に集中していた勢力が、後期には中流域にまで拡散する傾向にあることが示摘されている<sup>(註9)</sup>。南総地域の江古田金環塚や南岩崎吉野一号墳などの被葬者がそれであろう。このことは、取も直さず養老川中流域の豪族層の勢力拡大を意味するものであつて、加茂地区の在地豪族についても、この中に組み込まれていったものと考えられないであろうか。

さて、しかし、古墳時代後期のこの様な勢力構図の中で、当地域がスムーズに律令時代をむかえたとはし難い。すなわち、番後台遺跡や大和田遺跡の終熄と永田・不入窯の開窯時期とには、間隙が認められるのである。従つて、この観点からも模索する必要があるであろう。加茂地区には、奈良・平安時代の遺跡が極めて少ない。永田・不入窯跡は、人里離れた所に開窯されたのであろうか。



## IV 永田・不入窯跡群の調査略歴

千葉県下における須恵器生産遺跡の研究は、齋藤儀十郎氏による「寺崎製陶所」の発見に始まる。1915年のことであった。以来、これまでに11ヶ所の窯跡群が発見され<sup>註(10)</sup>、調査や研究の対象とされてきている。〔文献01〕

永田・不入窯跡群の発見は、1963年のことである。報文によれば、はじめに不入窯跡群を日野伝氏が発見したようであり、この年のうちに地元の南総郷土文化研究会が永田窯跡群をも含めて、須恵器窯と確認したようである。当時のことは、藤原文夫氏の「永田雑記」に詳しい。〔文献02〕

さて、この窯跡群については、以後今日までに4次にわたる確認調査と1回の胎土分析が行われてきている。以下、調査歴とその内容を例記して、永田・不入窯跡群の研究に資するものとしたい。

### 1974年

国士館大学の川清氏によって、窯跡の確認調査と、一部本調査が実施されている。調査の結果、永田窯跡群で2地点14基、不入窯跡群で1地点4基の窯跡が確認されている。調査所見は、以下のよう整理されよう。〔文献05〕

(1) 窯跡間における相対的な関係については、「あまり顕著な時間差は認めがたい」とした上で、

開業期……………永田3号窯(トレンチによる確認)・永田14号窯(13号窯下層)

全盛期……………永田1号窯(Ⅰ次窯—地下式、Ⅱ次・Ⅲ次窯—半地下式)永田5号窯(Ⅰ期・Ⅱ期—地下式無階無段登窯、Ⅲ期—半地下式無階無段登窯)不入4号窯(地下式無階無段登窯、焼成1次～4次)

最終段階………永田13号窯(半地下式無階無段窯)不入3号窯(半地下式無階無段窯)不入2号窯

にわたる3期の変遷として捉えている。

(2) 操業の時期については、「窯形態との関連から8世紀後半から9世紀前半の間」としている。

(3) 工人集団の系譜については、埼玉県虫草山窯跡との窯構造における類似性に注目して、「同時性もさることながら、技法(術)の系統性を考える必要があるのではなかろうか」として、716年の高麗郡の新設と郡内における上総郷の設置とに糸口を求めようとしている。

### 1982年

(財)千葉県文化財センターの依頼によって、三辻利一氏が胎土分析を実施している。対象とした試料は、吉川窯跡・中原窯跡群・石川窯跡群・南河原坂第4遺跡・永田・不入窯跡群・八辺窯跡の試料であり、分析の結果、その胎土の特長から印旛郡・千葉市域・市原市域の三地域に分類し得ることが明らかとなった。〔文献28〕

### 1983年

市原市教育委員会によって、永田窯跡群東側の河岸段丘上において、当該期の住居跡が一軒調査されている。住居跡内からは、須恵器(杯・短頸壺・甕など)のほか窯壁が出土している。また、この住居跡はカマドを持っておらず、工房址の可能性があると<sup>註(12)</sup>。

### 1984年

(財)市原市文化財センターによって、灰原部分の確認調査を実施しており、灰原が窯跡前面の水田下に遺存していることと、今回の調査で第3トレンチ区とした地区の窯跡の存在とを確認した。〔文献29〕

## V 調査の方法

### 1. 確認調査の方法

調査は、不入窯跡群側と永田窯跡群側とに分けて、昭和 61 年度には不入窯跡群側を、また、昭和 62 年度には永田窯跡群側を確認した。

それぞれの確認調査による範囲は、昭和 59 年度の確認調査成果である灰原分布範囲であるところの段丘面縁辺裾部より 20 m に限定されている。従って、両年度の確認調査対象範囲は、第 4 図に示すとおりであった。

調査にあたっては、窯跡群の範囲が広がることや工房址等の付属施設が将来にわたって発見される可能性のあること、或いは、窯跡本体の調査を余儀なくされる場合のことを考慮して、広い範囲での方眼網を想定した。(第 4 図)

従って調査区は、公共座標を使用し、100 m × 100 m の方眼網を設定し、これを大グリッドとした。また、調査対象区が、20 m 巾の帯状を呈するもので、かつ確認調査であることを考慮して、この大グリッドをさらに 20 m 方眼の中グリッド 25 ヶ所に分割した上で、2 m 方眼の小グリッドにまで再分割する方法をとった。

大グリッドの名称は、北から南にむけて I ~ VII、東から西にむけて A ~ I とした上で、これらのアルファベットと数字との組み合わせで A II 区・B III 区などと呼称することにした。また、中グリッドについては北東の隅から南西の隅にむけて a ~ y の小文字で表すこととし、大グリッド名のあとに付して呼称することとした。小グリッドは、20 m 方眼の中グリッドをさらに 2 m 方眼で 100 分割したものであり、この際の呼称も中グリッドの呼称と同様、北東の隅から南西の隅にむけて 1 ~ 100 の数字で表すこととし、中グリッド名のあとに付して呼称することとした。従って DIV y - 26 区と言った場合には、2 m × 2 m = 4 m<sup>2</sup> の広がりをもつ一点を意味し得るものとした。

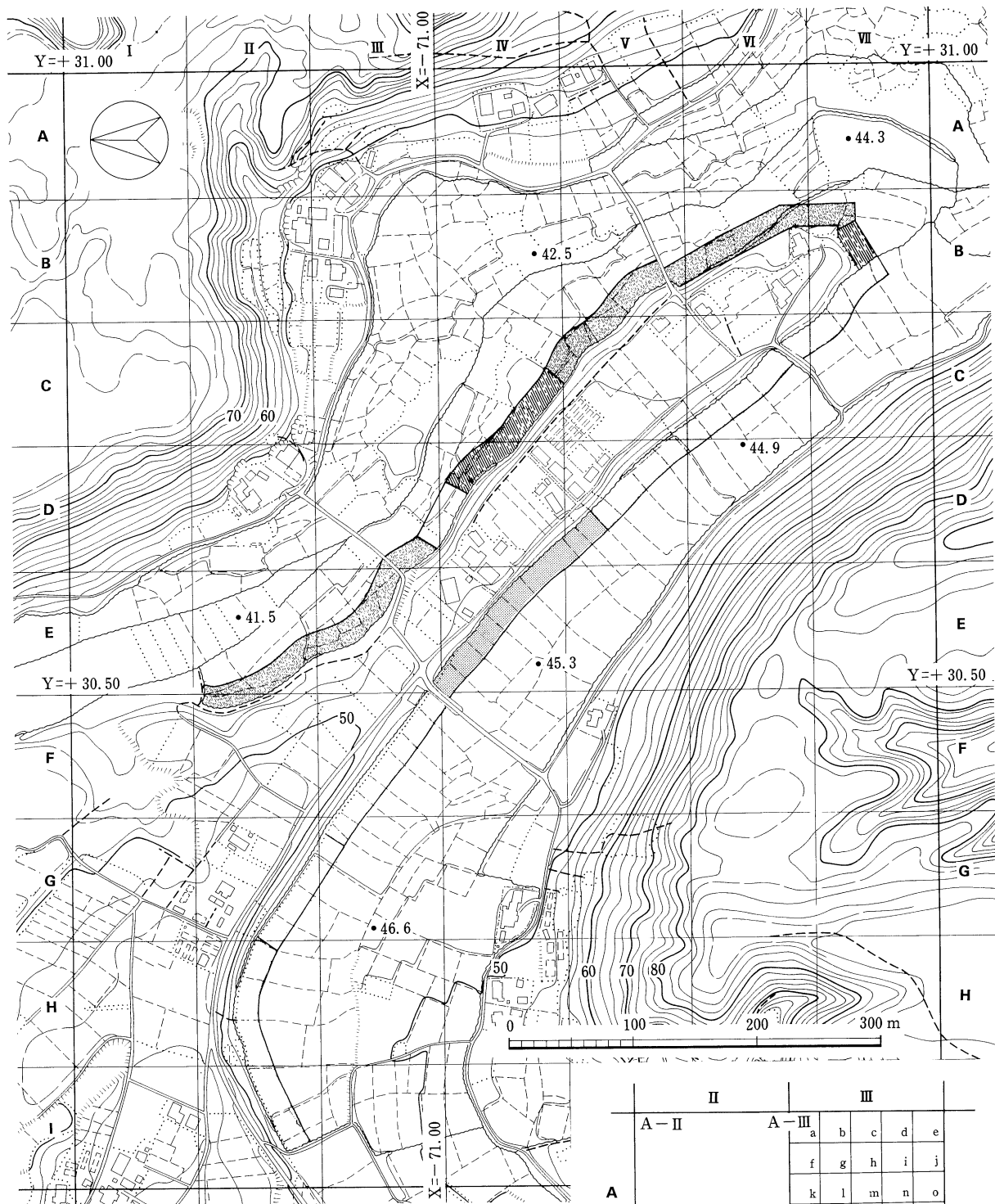
確認調査ではその上でこの小グリッド 2 コマで構成される 2 m × 4 m の調査区を基本単位とし、番号の若いグリッドの名称で代表することとしたが、窯跡地区はこの限りではなく、トレンチによる調査を実施した。不入窯では、その広がりを明らかにする為に、比較的縁辺部に偏向して調査区の設定を行った。これに対して永田窯跡群の調査では、既に前年度までの踏査等によって窯跡の分布がおおよそ想定されていたので、この部分についてはトレンチ調査に切り換え、窯跡物原部の範囲や構造が理解しやすくなるように配慮した。






調査区は水田及び休耕地であり、物原確認面までの層厚は 80 ~ 100 cm 程度であった。また、旧河道と窯跡群との関係および構造を把握する為に、部分的な旧河床面の位置と遺物包含層の確認を実施した。

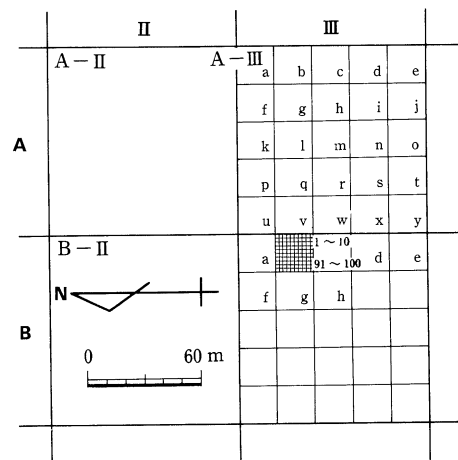
調査にあたっては、第一年度の不入窯については全て人力による調査を実施したが、第二年度の永田窯跡群側では、基本層序が既に明らかとなっていたので、遺構確認面直上層まで重機による掘削を実施したグリッドもある。

### 2. 整理作業の方法

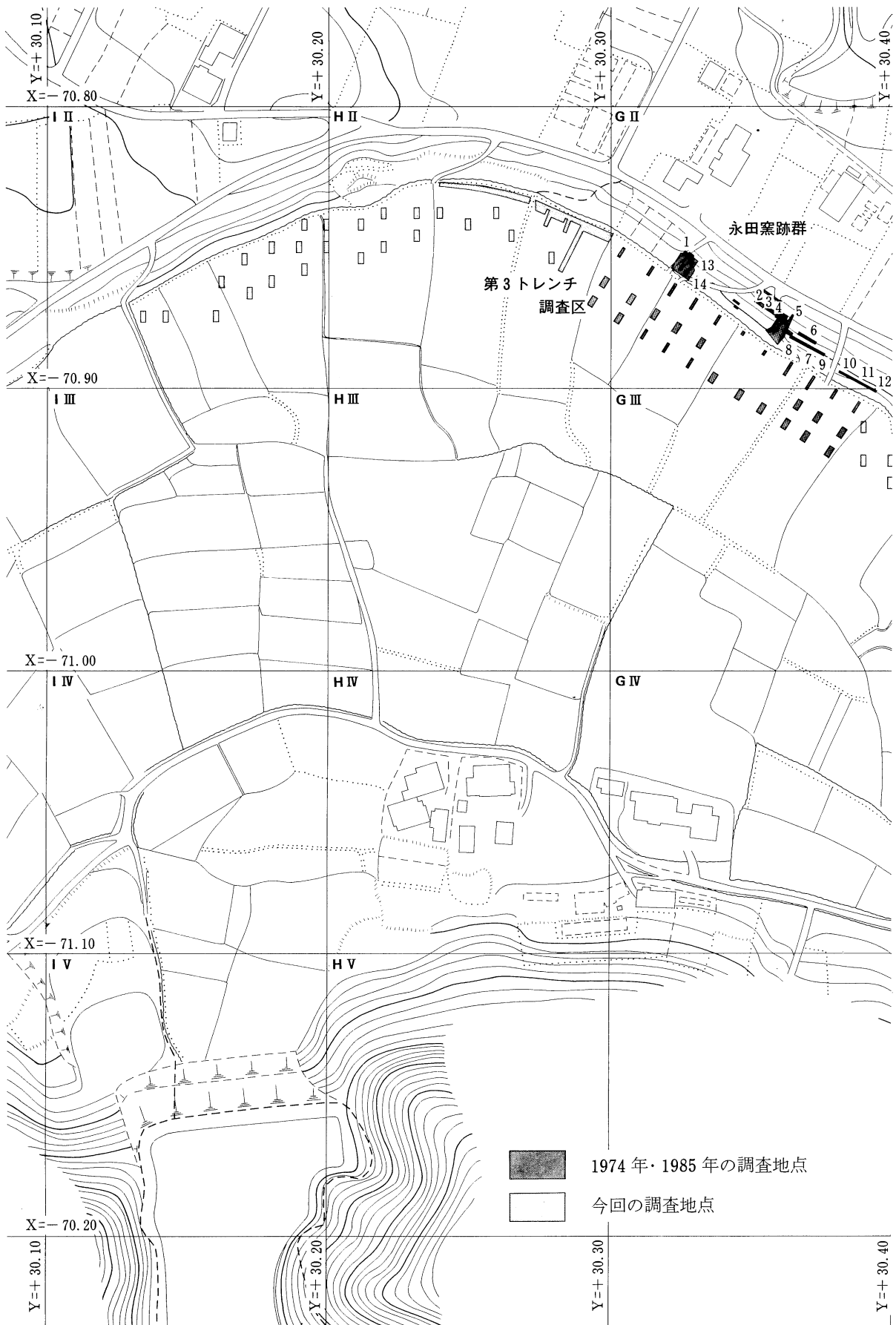
遺物量が多量であることから、水洗・注記に手まどった。接合関係は、十分に把握し得なかったが、通常の方法において分類し、整理することに努めた。



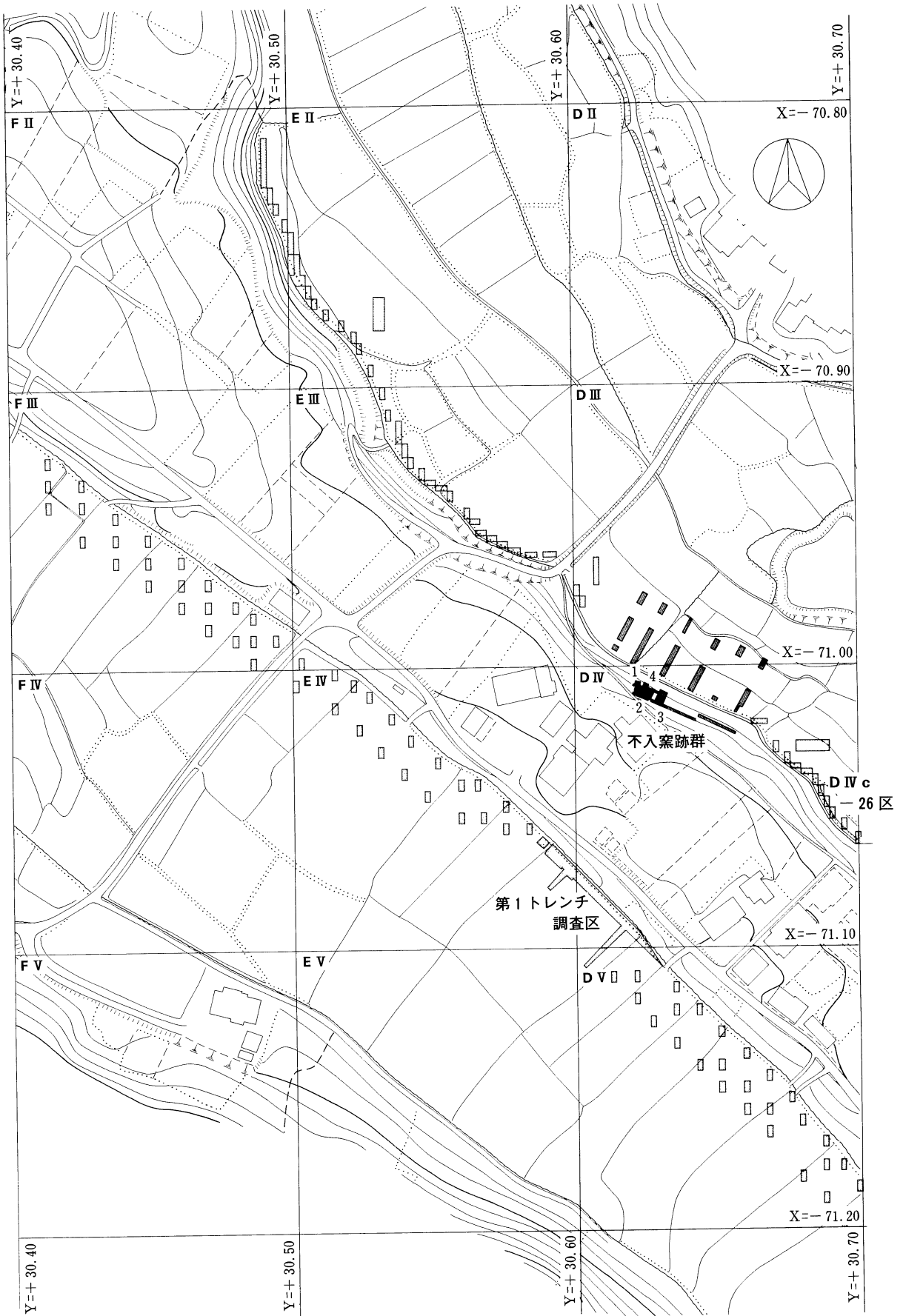
-  昭和 61 年度 文化庁補助分確認調査対象範囲
-  昭和 61 年度 農林省補助分確認調査対象範囲
-  昭和 62 年度 文化庁補助分確認調査対象範囲
-  昭和 62 年度 農林省補助分確認調査対象範囲
-  昭和 60 年度 確認調査対象範囲



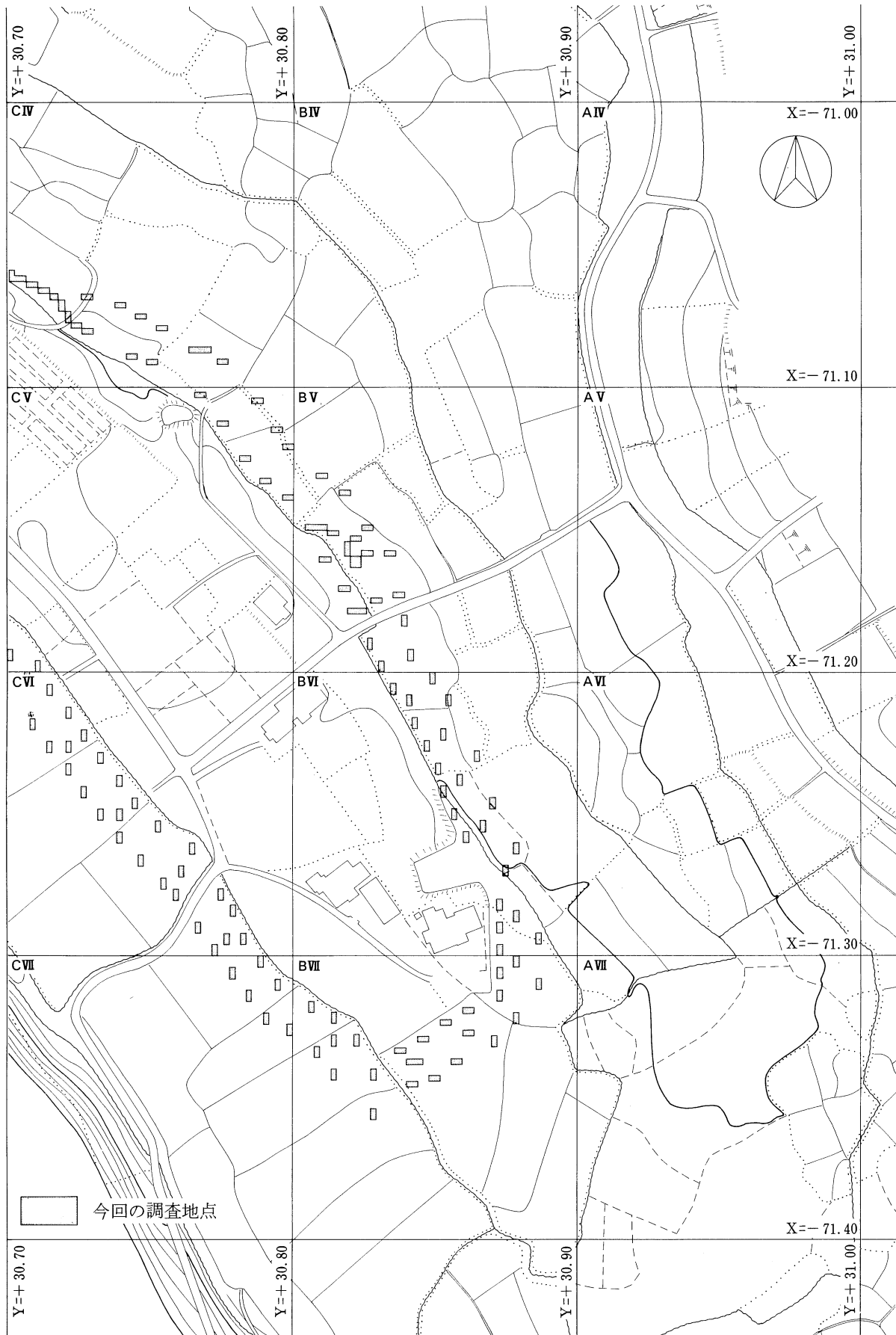
第 4 図 確認調査の対象範囲とグリッドの設定方法



第5図 永田・不入窯跡群調査地点配置図(1)



第6図 永田・不入窯跡群調査地点配置図(2)



第7図 永田・不入窯跡群調査地点配置図(3)

## VI 調査成果の概要

昭和 61 年度および昭和 62 年度における確認調査の成果については、概ね次のとおりであった。

**昭和 61 年度**…不入窯跡群側 13000 m<sup>2</sup>を対象として調査を実施した結果、古墳時代前期および奈良平安時代の溝状遺構二条をはじめとして、調査区域の大半にわたって、少量ながらも良好な遺物の包蔵を確認することができた。本報告では、XとX Iの両章において取り上げることとする。

**昭和 62 年度**…永田窯跡群側 16000 m<sup>2</sup>を対象として調査を実施した結果、第 1 トレンチ調査区および第 3 トレンチ調査区において、須恵器窯の物原部分が遺存していることを確認した。このうち、第 3 トレンチ調査区については、1984 年度調査において窯跡の存在が確認されていたものである。他方、第 1 トレンチ調査区については、今回の調査において、新たに確認したものである。本報告では、VIIとVIIIの両章において取り上げることとする。尚、関連資料としてIX章にG II d - 74 区の一括表採資料を掲載し、紹介することとする。

以下、時期的に古いものから順に取り上げて、調査区の歴史を概観しておきたい。

- i) **縄文時代**…不入飛地の曲流短絡地形によって取り囲まれた段丘面上では、若干ながらも縄文土器の表採が可能であった。しかし、量的には非常に少なく、遺構の存在も確認されなかった。
- ii) **古墳時代**…縄文時代に続く弥生時代の遺構・遺物は、まったく発見されていない。これに対して、古墳時代の遺物の包蔵は量的にも多く、段丘面南側寄りに偏在して認められる。今回の調査でも古墳時代前期の所産と考えられる溝状遺構が一条、B V w - 26 区において確認されている。また、遺物の包蔵層を概観すると、旧河川の下刻活動が終熄したと考えられる層に包蔵しており、メアンダー形成期の好資料を提示している。
- iii) **奈良・平安時代**…奈良・平安時代になると、須恵器窯が操業される訳であるが、この時期の資料の分布は、窯跡群周辺に極端に集中している。このことは、当地が古墳時代後期の集落終熄後、生活圏としては利用されていないことを示すものであって、永田遺跡の住居跡 1 軒の存在を考慮したとしても、窯場としての位置付けは動き得ないものと考えられる。須恵器工人集団の集落は、別途隣接地に求めるべきであろう。
- iv) **中・近世**…永田・不入窯の終熄が酸化炎焼成の土器群とどの様に関連し合うかといった問題は残されるとしても、これに連続する時期の遺物群は認められていない。しかし、上層では調査区域のほぼ全域にわたって、近世の所産と考えられる遺物が出土している。特に、良好な保存状態の観察されるグリッドでは、宝永期のものと思われる降下火山灰層と共に、天保通宝等の古銭や煙管の吸い口金などが出土している。このことは、永田・不入窯の操業後、湿原化していた当該地区においても、近世までには近隣地区に村落が形成され、水田が営まれるようになったことを示すものであり、爾後現在に至っていることを物語っているものと考えられる。

## Ⅶ 第1トレンチ区の調査

第1トレンチ区の調査は、今回の確認調査期間中に、DIV区において新たに発見された須恵器窯跡の灰原及び物原部分に関する確認調査である。

DIV区における須恵器窯発見の経緯は、以下のとおりである。

永田・不入窯跡群における須恵器窯の立地は、1984年度調査の報告にも示摘されているように、比高差があつて勾配も急な所に想定されてきた。従つて、不入窯跡群側の調査では、急勾配の求められるEⅡ、EⅢ、DIVの各区にあつては、河岸段丘面縁辺部に極端とも言える程偏向した調査区の設定を試みてきた訳であつた。これに対して、永田窯跡群側第1トレンチ区は、昭和61年秋の水稲収穫にあつて、DIV区の永田側斜面から農業用機械を搬入した事によって、始めて明らかとなつたものである。現地における現水田面と段丘平坦面との比高差は、第8図に示すとおり、僅か2m程であり、発見後にあつても、現水田面での資料表採は殆ど認められないような状況下にあつた。地元耕作者の情報提供によって知り得たものであることを明記しておきたい。

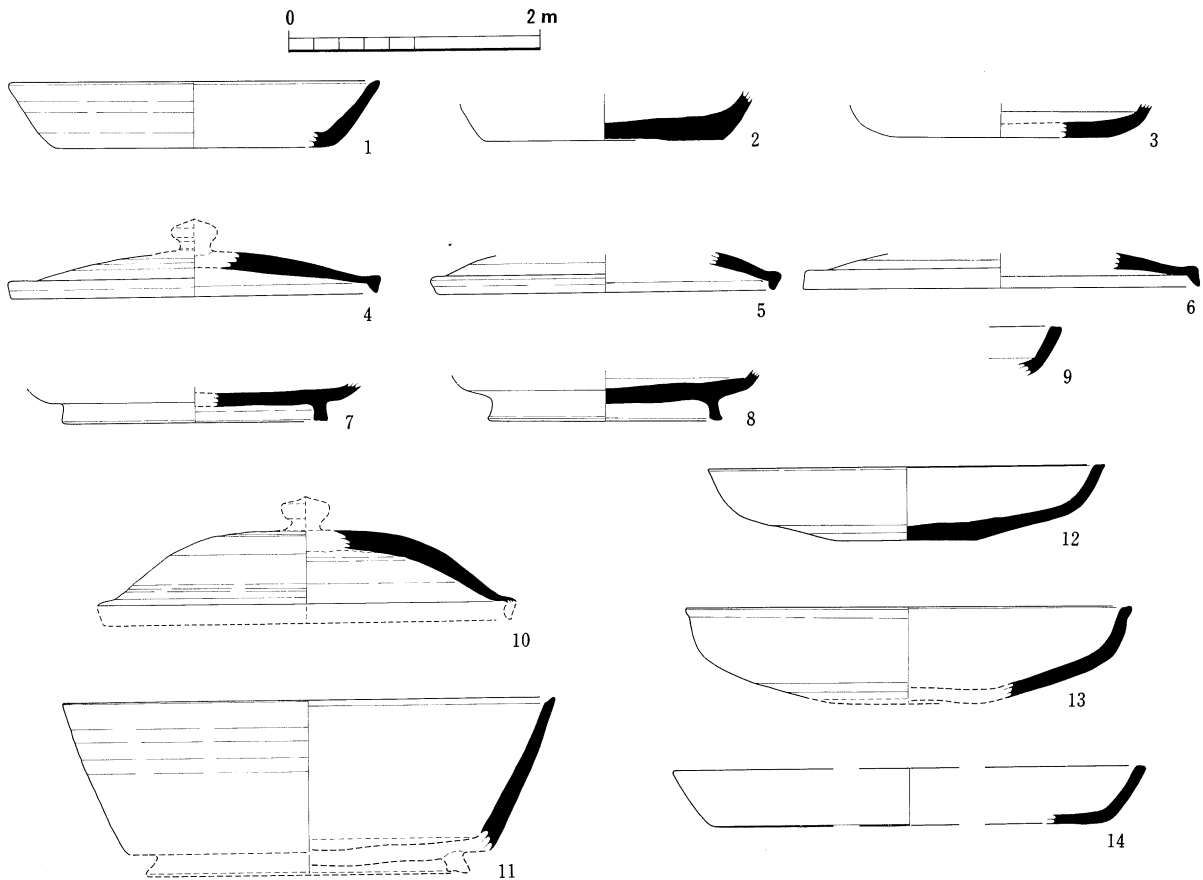
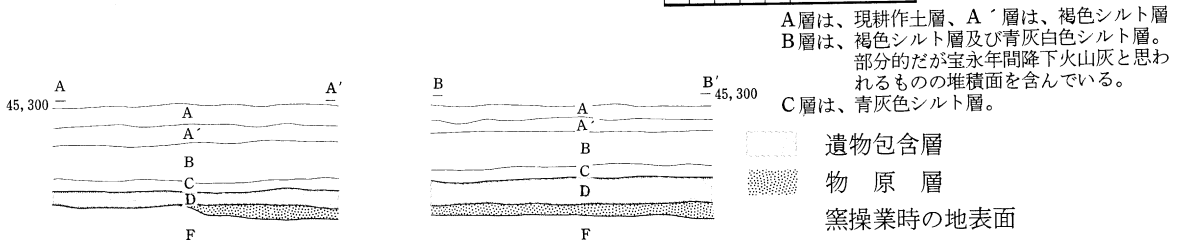
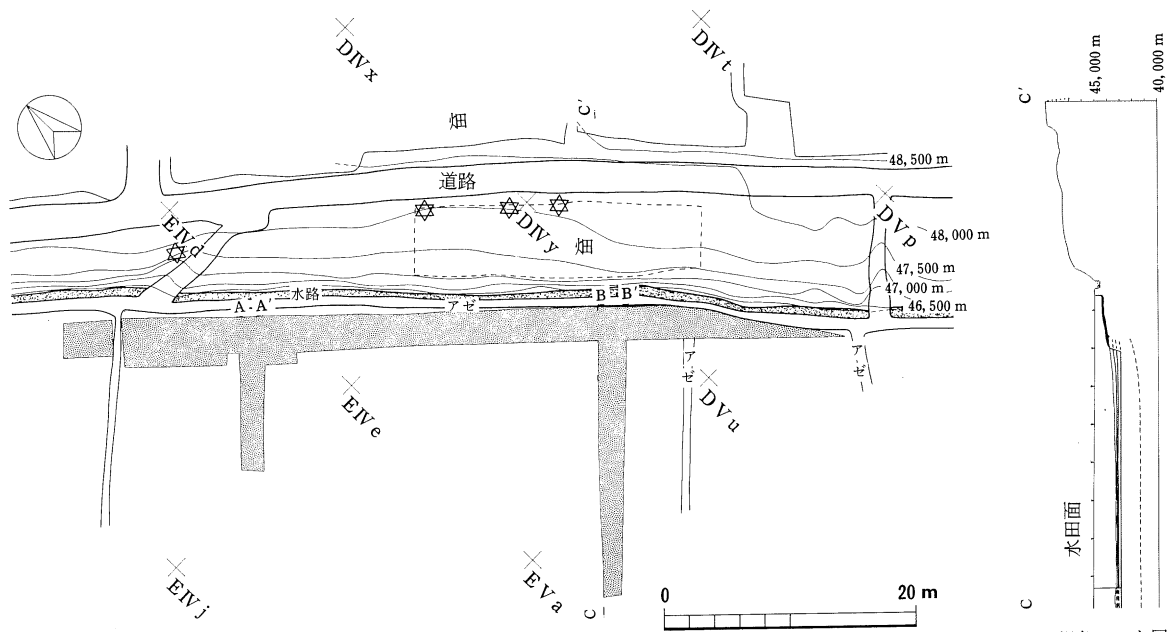
この調査地区において想定される窯の位置と基数については、第8図上段の地形図に☆で表示したとおりである。いづれも、窯体本体は現道路の下層にあつているものと想定される。灰原には、窯跡単位による集中傾向は認められない。また、縦軸(C～C')における物原の広がり、窯操業時の地表面における傾斜変換点までのものが原位置を止めているようであるが、包含層の広がり、これを越えて、調査区域の端にあたる20mラインにまで粗らながら延びていることが明らかとなっている。

今回の調査で出土した遺物のうち、主なもののみを取り上げて、第8図1～14および第12図70～74に図示して掲げた。以下、これらについて概説する。

1～3に掲げた杯についてみると、2および3は右回転の回転ヘラケズリ調整が施されているもので、調整下に回転糸切離し痕跡が観察されるものである。当該地区出土の杯類底部にみられる技法上の特徴としては、上記のもの量が圧倒的に多い。しかし、この他にも、底部全面回転ヘラケズリ調整の後に、中心部のみにケズリ再調整を施すものや、底部回転ヘラケズリ調整後に再度外周部のみケズリ再調整を行うもの・回転糸切り離し後無調整のものなどが認められる。外周部にケズリ再調整を行うものは、石川窯跡群においても知られており、佐久間豊氏の分類ではC類とされているものである。〔文献24〕

蓋類は、有蓋形態の高台付杯に伴うものと、鉢・壺類に伴うものとが認められている。このうち、杯類に伴うものからみると、その法量において、既ね大(10)・小(4～6)に二分されることが明らかである。また、他地点との法量比較では、表-4に窺われるようにDIVc-26区出土のものとは、大差が認められないものの、HⅡc-0区すなわち第3トレンチ調査区のものとは、やや異なつた値になっていることが示摘できよう。蓋類には、他に第12図に掲げた小型のものが認められる。これらも、形態的には既ね三分類が可能であるが、セットの明らかなものは、第12図-70の如く、コップ状を呈する鉢との関係のみである。蓋類の焼成頻度を高い方から順に示すと、杯類蓋小→鉢・壺類蓋→杯類蓋大であつた。図示し得なかつたものの中から、特筆すべきものをあげるとするならば、硯類として風字硯の焼成をあげることができよう。





第8図 第1トレンチ調査区の地形・出土遺物

## VIII 第3トレンチ区の調査

第3トレンチ区の調査は、1984年度の灰原確認調査によってA区として紹介された須恵器窯分布地点の灰原部分に関する確認調査である。今回の調査において設定したグリッドの名称では、HⅡ-b区に窯本体は想定される。

HⅡ-b区における須恵器窯発見の経緯は、以下のとおりである。

永田・不入窯発見の経緯と調査歴については、IV章に瞥見したとおりであるが、踏査・研究については必ずしも公表されているわけではなく、把握し得ない。今回須恵器窯の存在を灰原から確認したHⅡ-b区の須恵器窯についても、その存在は早くから知られていたようである。1974年の国土館大学による調査では、対象とされていないようであるが、この時期の前後に電探による確認がHⅡ-b区で実施されている<sup>註(11)</sup>。しかし、その後、報告されることもなく、他の窯跡との位置関係が明示されたのは1984年のことであった。現地は、下草程度の生える植林地前面の斜面であり、灰原が地表面に若干観察されていた。

現地における現水田面と段丘平坦面との比高差は、第9図に示すとおり5.5m程あり、築窯に適した傾斜面を有している。

この調査地区において想定される窯の位置と基数については、第9図上段の地形図に☆で表示したとおりである。いずれも、窯体本体は現植林地内の斜面部に当たっているものと想定され、炊き口については、灰原がトレンチ内にかかるものもあるので、上・下に前後するものもあると思われる。

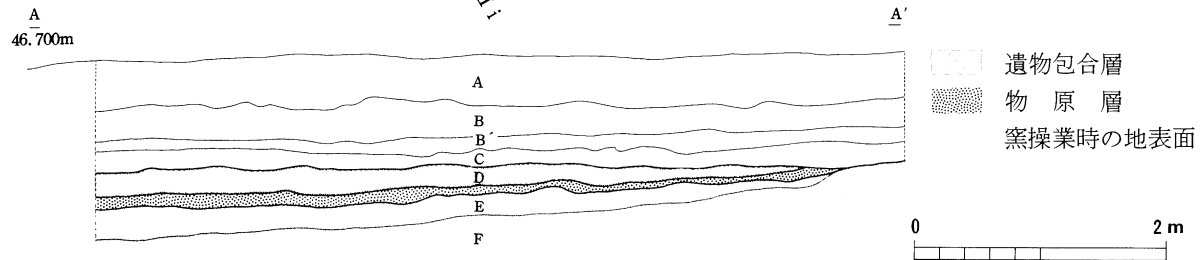
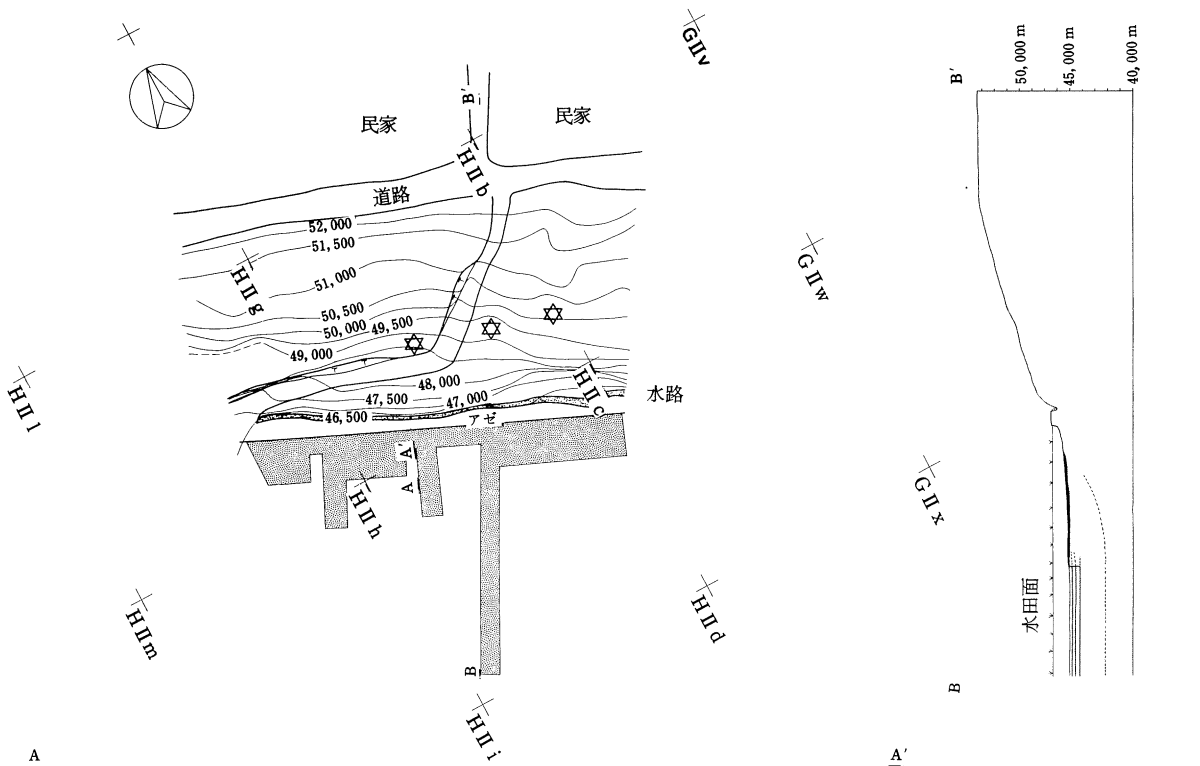
トレンチ調査区内の遺物分布は、全面に涉って密であり、灰原の窯跡単位による集中傾向は認められない。また、縦軸(A～A')における物原の広がり、第1トレンチ区と同様であり、影響範囲は調査区域の端にあたる20mラインにまで粗らながら及ぶことが明らかとなっている。

出土遺物については、第1トレンチ区同様、主なもののみを取り上げて、第9図15～26・第10図27～35に図示して掲げた。ただし、これらの遺物は、1984年時点で表採したものである。以下、これらについて概説する。

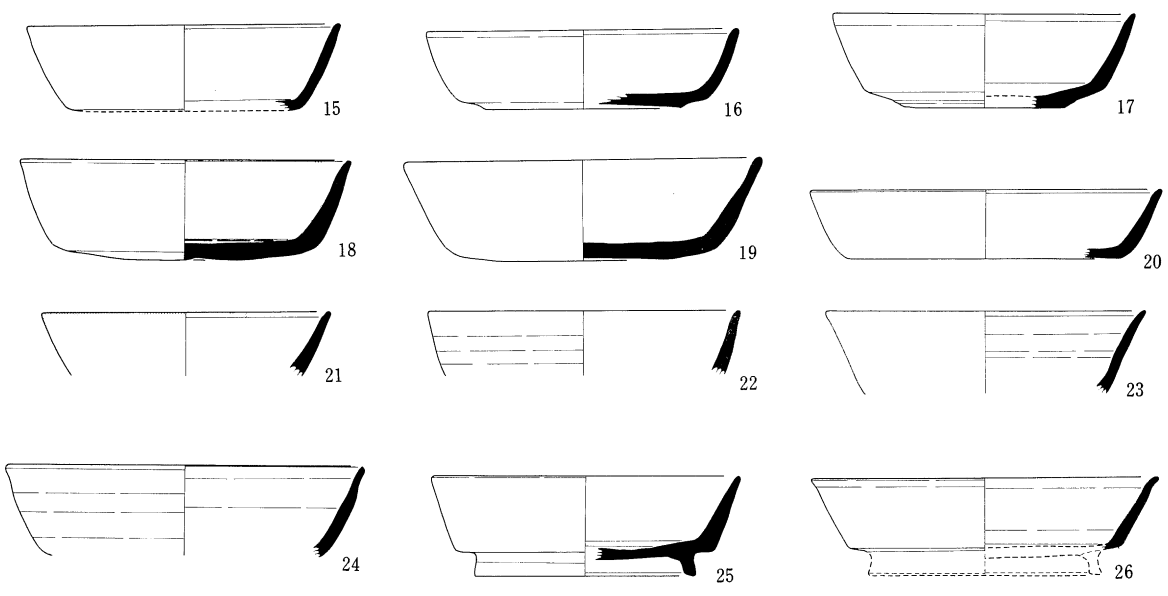
杯類は、無高台のもの(15～20)と高台付のもの(25～26・32)とがある。21～24については、不明である。18に掲げた無高台の杯は、底部中央にヘソ状の粘土片がみられ、ヘラ切りの可能性を有している。20・21では、重ね焼きの痕跡が明瞭に観察される。32は、おそらく碗型を呈する無蓋のものであろう。底部外面中央に回転糸切り離し痕跡を残している。既して、杯類には法量分化が認められるようであるが、窯認定が困難なため傾向として指摘し得るにとどまる。33に掲げた皿は、回転糸切り離し後無調整のものである。35の鉢は、体部下端に手持ちによるヘラケズリ調整が施されている。完形品である。図示しなかったものの中から、特筆すべき資料を例記すると、次のとおりである。

素縁長頸壺(図版10-65)コシキ取手(図版11-75右上段)高台付盤、高盤類、沈線文を有する長頸壺の頸部(図版10-67)。

以上のように、第3トレンチ出土資料の中には、高台付盤や高盤類、コシキの取手などが存在するなど永田14号窯に近い器種構成や類似形態がみられており、第1トレンチ区が風字硯などを出土するのは逆に、古い様相が窺われている。



A層は、現耕作土層及び褐色シルト層  
 B層は、褐色シルト層及び青灰白色シルト層  
 B'層に宝永年間降下火山灰と思われる堆積面が認められる。  
 C層は、青灰色シルト層  
 D層は、明褐色シルト層・遺物及び炭化材も含まれている。  
 E層は、明褐色シルト及び灰白色シルト層  
 F層は、灰白色シルト層



第9図 第3トレンチ調査区の地形・出土遺物

## IX G II d - 79 区表採の遺物について

本章では、昭和 62 年度調査期間中に、G II d - 79 区で一括して表採された資料を報告することにする。この資料は、その出土状況からみて、永田 10 号窯の窯体内の整品と考えられる。永田 10 号窯については、1974 年の国士館大学による確認調査の折に、トレンチ調査でその存在が確認されているわけであるが、調査の性格上、出土している資料の点数も少ない。今回の資料は、永田 10 号窯の該当地にあたる G II d - 79 区において、山芋の採取が行われた際に出土したものと考えられる。比較的遺存率の高い一括資料である。第 10 図 36 ~ 48 に図示したものがこれである。

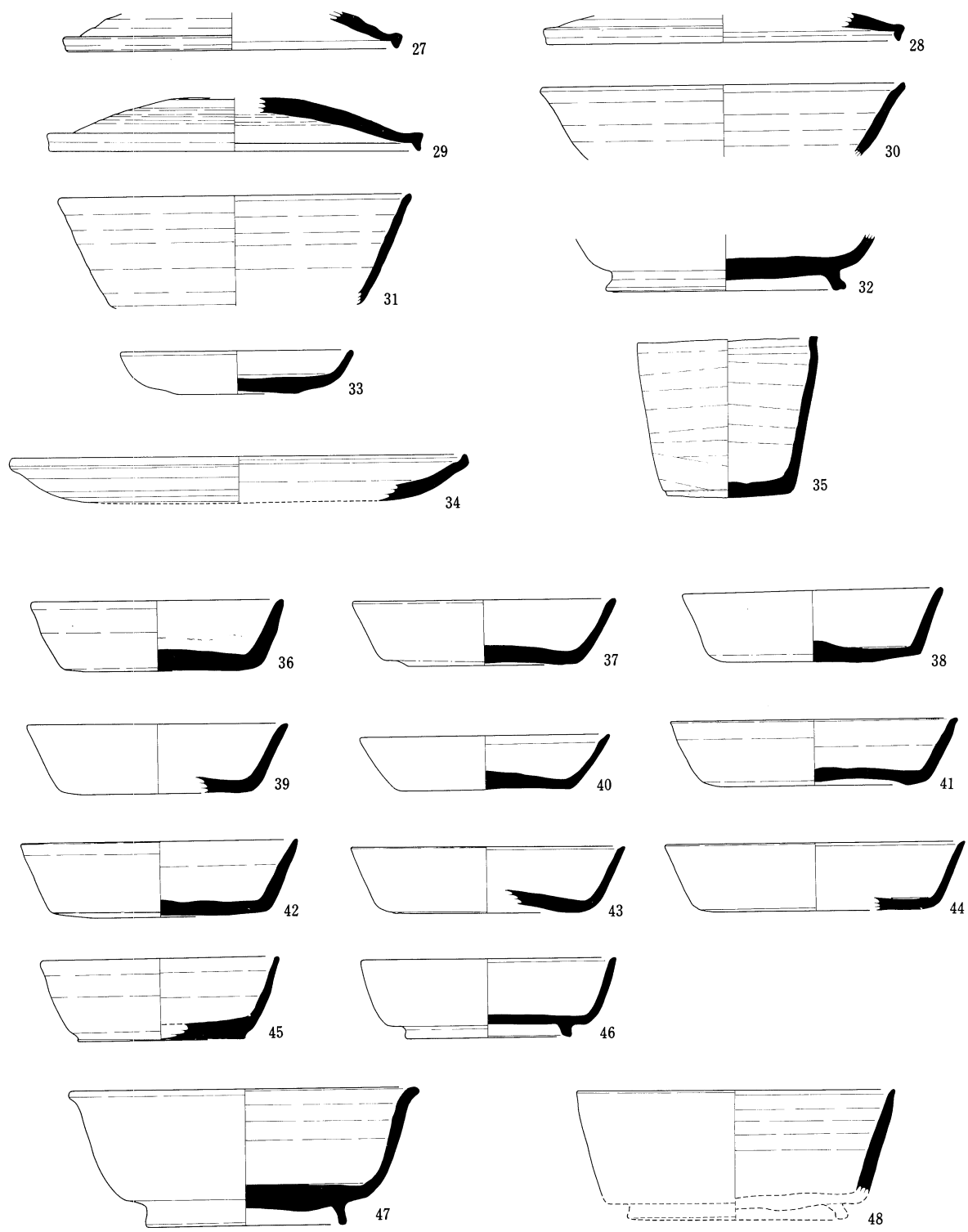
表採された資料は、無高台の杯 10 個体と高台付の杯 3 個体であった。

無高台の杯については、その法量から、口径でみて 12 cm 前後のものとは 14 cm 前後のものとは分類することができる。しかし、観察し得る限りでは、回転糸切り離しの後、底部外面に右回転の回転ヘラケズリ調整を施す点で一致している。このような底部外面の調整技法上の特徴から言うならば、高台付の杯も同様であり、永田 10 号窯においては、安定した技法のひとつと観ることができよう。他方、肉眼観察による胎土や焼き上がり、観た時の印象などから言えば、これらの資料が同一の工人の手によって作られたとは考え難い。殊に、胎土組成において、白色針状物を観察するものと観察しないものとの違いは比較しやすく、今後検討されるべき課題であろう。もし仮に、これらの違いが工人差からくるものであるとするならば、複数人の工人によって、ひとつの窯を共有していることになり、集団の組織や窯の性格を考える上で、有用な指標となり得るだろう。高台付杯にも法量分化が認められることは、挿図を一瞥すれば明らかなおりでである。

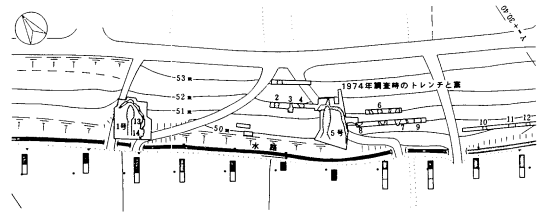
次に、杯類の成形方法について触れておきたい。杯類の成形方法については、既に多くの示摘があるところであるが、本章の資料にも成形過程を示すと考えられる資料がみられている。

まず、第 10 図 36 に掲載した杯であるが、体部内面に粘土紐巻き上げの痕跡が確認される。須恵器の成形に粘土紐巻き上げが用いられているとする理解は通有のことであるので、事実報告として明記するに留めておきたい。次に底部についてである。底部については、円柱や円盤を用いている例が報告されている。これに対して、永田 10 号窯表採資料中には、粘土紐巻き上げによると考えられる資料(第 10 図 39・45)がみられている。すなわち、粘土紐巻き上げによる成形を仮定した場合、粘土紐相互の接合は、有軸回転台を利用したものであったとしても、圧着されているだけにすぎない。この圧着面は、焼成されることによって面を構成するのであるが、圧着が不十分な場合、その製作過程(たとえば乾燥の段階など)において、圧着面による剥離が充分に考えられる。この様にしてできた剥離面は、通常の壊れとは異なった割れ口として観察される。第 10 図 39 の場合は、底部中央の剥離痕跡から、粘土紐の紐帯幅が復原し得るものであり、45 の場合は、底部断面観察において、粘土紐相互の圧着面が観察されるものである。

さて、しかし、永田 10 号窯表採の杯類が全て、この粘土紐巻き上げによる成形のみによって成形されている訳ではない。46 に掲げた高台付杯は、円盤状の底部から体部を成形していった可能性が認められる。これらの成形技法にみられる違いや胎土の違いなどが、同一窯内における時期差を示すものであるのか、工人の集団差や個性の差によるものであるのかは、現時点では明らかになっていない。



27～35 第3トレンチ調査区出土遺物  
 36～48 GⅡd-79区(永田10号窯)表採遺物



〔参考〕『永田・不入窯跡』市原市教育委員会(1985)より転載

第10図 第3トレンチ・GⅡd-79区出土遺物

## X DIV c - 26 区の調査

昭和 61 年度調査対象地内の DIV c - 26 区から、第 11 図に掲げた遺物群が纏まって出土している。

これらの一括遺物は、第 11 図上段に図示したような地形上の落ち込みに出土したものであるが、性格は明らかではない。

調査区内の遺物包蔵状況・分布状況については、既に折々に触れてきているとおりであるが、永田・不入窯産須恵器の分布は、窯跡部周辺に極端に偏向する傾向にある。不入窯跡群の灰原が DIV c - 26 区にまで延びていないことは、連続して配置した調査区の結果からみて明らかであり、南側段丘面上および斜面部の踏査と清掃・観察においても、関連する遺構を想定するには至らなかった。遺物の包蔵範囲は、さらに東側へ延びることが予想される。出土した遺物群のうちで、図示し得たものは、第 11 図 49 ~ 69 に掲げた 20 点であった。以下、これらについて概説する。

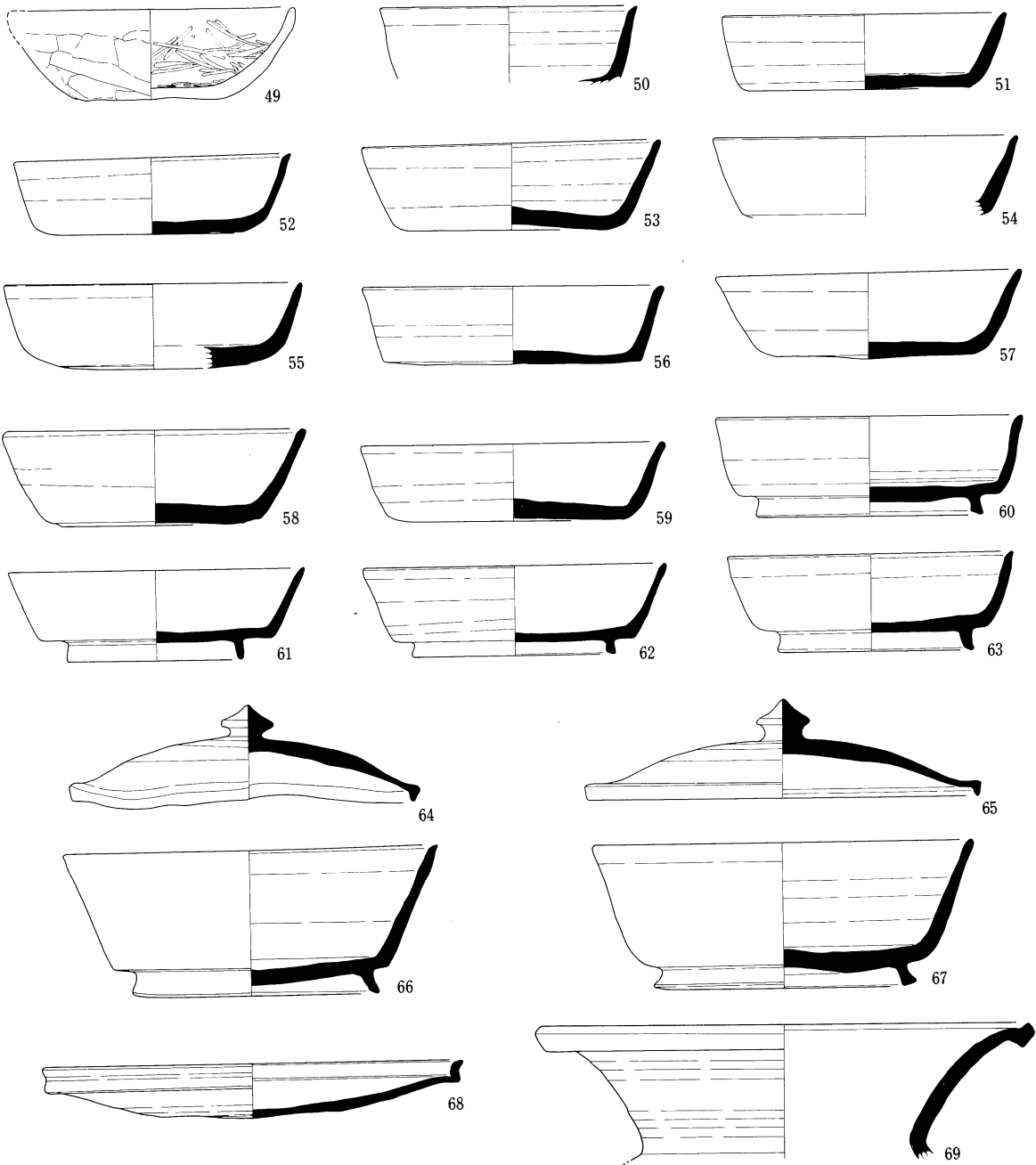
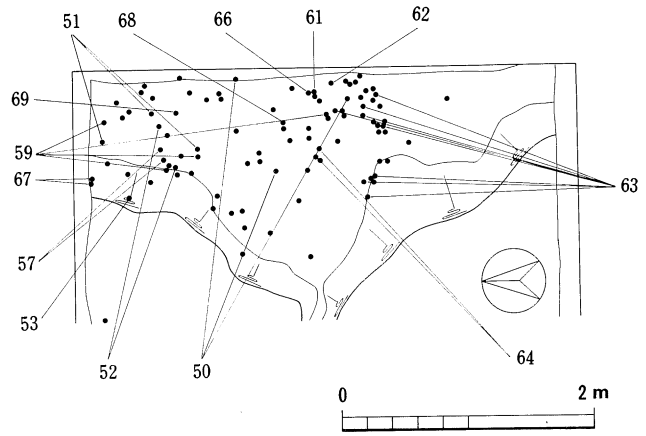
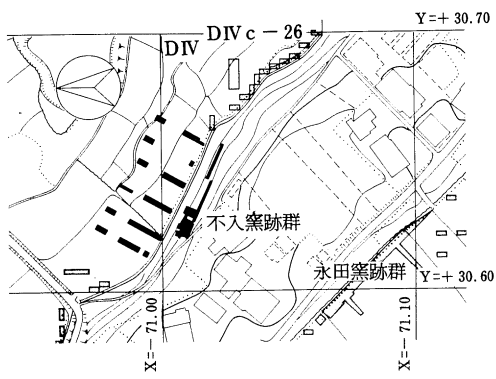
49 は、土師器杯である。杯内面には、ミガキが施されている。胎土は須恵器と類似している。須恵器との相対関係を知る上で、良好な資料であろう。

須恵器杯類は、無高台のもの(50 ~ 59)と高台付のもの(60 ~ 63・66・67)とに分けられる。さらに、無高台のものについてみると、50 を除き法量差は殆ど認められないが、胎土では黒色微粒や白色針状物を含むものと含まないものに、また、底部の調整技法等では、底部糸切り離し後に全面回転ヘラケズリ調整を施すものと、無調整のものがある。また、回転方向でも 52 のみは左回転であって、ヘラ切りの可能性を残している。同一窯内の資料であっても、永田 10 号窯の資料のように胎土や技法の異なるものが含まれるとするならば、DIV c - 26 区についても一括性を軽視することはできない。

高台付の杯類が、その法量において大(66・67)小(60 ~ 63)に分類し得ることは言うまでもあるまい。高台部の形態や貼付位置に細分の可能性がある。殊に 61 に掲げた高台付杯の胎土・形態は他のものと比して異なっており、高台部の形態は類例を周知の資料にみない。

蓋類では、有蓋形態の高台付杯に伴うものが二点出土している。挿図では高台付杯の大とセットをなすかの如くに掲載したが、ここにある蓋は高台付杯の小とセットをなすものであることが 64 によって明らかとなっている。すなわち、第 11 図 64 に掲載した蓋は、内面外周部に幅約 3 cm で自然釉の付着が認められており、このことから窯詰め状態の復原が可能である。これによれば、有蓋形態の高台付杯は、杯部の上に蓋部を天地逆転させて乗せ、その上に杯部をさらに重ねるようにして窯詰めされている。従って、蓋部内面において自然釉の付着が認められない部分は、上段の杯部の高台部径と一致しなければならない。このことから更にその径の比較を行うと、64 の蓋とセットをなすと考えられる杯部は、62 に近似したものであることが想定されるのである。64 の推定内径 14.0 cm と 62 の口縁部径 13.5 cm とは、十分にセットをなし得るものであろう。

杯類の他には、盤類(68)と甕類(69)とが出土している。盤類については、類似したものが第 1 トレンチ調査区にも少量ながら認められている。類例を求めて、窯の特定をも試みても必要があろう。



第11図 DIV c-26 区の位置と出土遺物

## X I その他の遺構・遺物

### 1. その他の遺構

昭和 61 年度・昭和 62 年度の全調査を通じて確認されたその他の遺構は、E II S - 34 区拡張グリッド、B V w - 26 区・B VII v - 21 区・C VI q - 9 区で確認された溝状遺構 4 条であった。このうち、E II s - 34 区拡張グリッドでは、溝底面より永田・不入窯の製品と考えられる蓋が一点出土している。短絡地形でも下流側にあたる不入窯面では、排水路程度の小河川が流れていたのであろうか。確認調査では詳とし難い。B V w - 26 区で確認された溝状遺構は、覆土中出土の細片等からみて、五領期の所産と考えられる。五領期の遺物は、近隣する B V s - 81 区からも出土しており、B V c - 81 区のあたりが地山層傾斜変換点にあたることからみて、旧河川へむけての排水路と考えられる。溝中央には、木杭が二本直立して出土している。遺構は土納などで保護して埋め戻してある。B VII v - 21 区および C VI q - 9 区で確認された溝状遺構は、おそらく鬼高期の所産であろう。いずれも巾 1 m 前後深さ 0.5 m 前後の U 字形を呈するものであった。

### 2. その他の遺物

昭和 61 年度・昭和 62 年度の全調査を通じて出土した遺物の総量は、整理箱で 80 箱程度であった。しかし、そのうちの大半は窯跡関係資料であって、その他の遺物は極めて少ない。調査区内出土のものは、天保通宝 1 枚と煙管の吸口 1 つを除くと、いずれも小・細片であった。出土頻度の高いものは、近世の所産と思われる陶磁器類であって、鬼高期の土師器片がそれに続いている。五領期および縄文早・前期の資料は稀少であった。しかし、それらの出土地点では特に偏りは認められない。窯跡関係資料のあり方とは、全く異なった様相である。

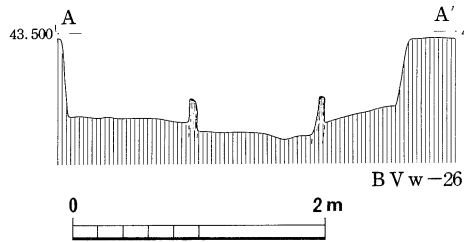
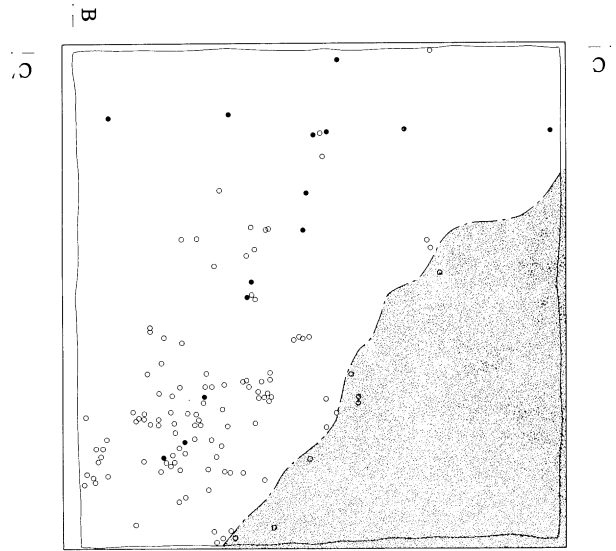
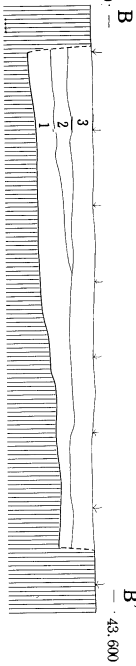
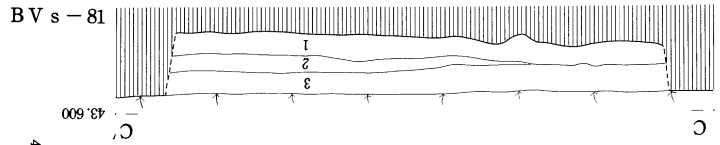
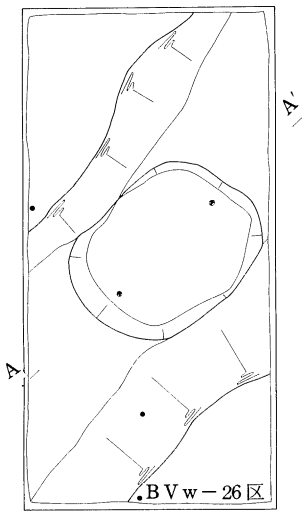
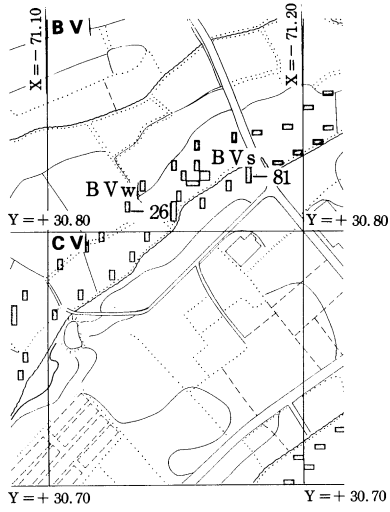
このことは、調査区によって取り囲まれた河岸段丘面上の踏査結果とも一致している。すなわち、段丘面上の遺物散布状況を見ると、五領期および鬼高期の土器片は、広い範囲に認められるのに対し、須恵器片は、二十数基の窯を有する地域であるにも係わらず、F II x 区を除けば、全くといって良いほど、表採することができなかった。IV 章で触れた住居跡に隣接する地区である。

このような分布の違いは、遺跡の性格の差によるものであろうか。段丘面の先端にほど近い B VI y 区から B VII p 区にかけて、墳丘状の高まりが 2 ヶ所に知られていることを付言しておくこととしたい。

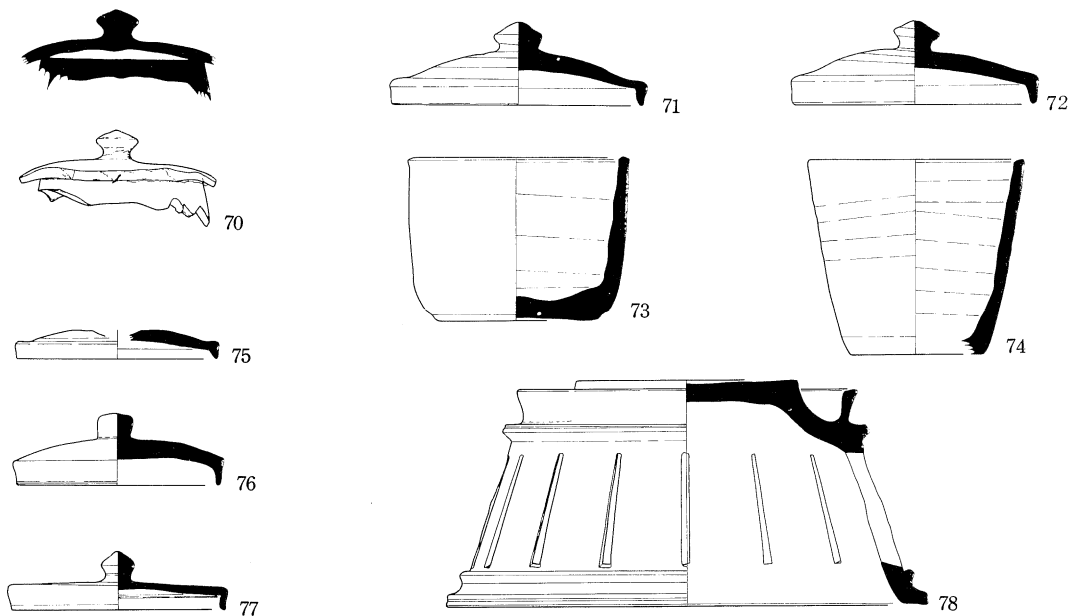
#### 註

- (1) 藤原文夫「養老川」ほか。『市原市史 別巻』(1979)市原市教育委員会
- (2) 徳橋秀一ほか『姉崎地域の地質』(1984)地質調査所
- (3) 藤崎芳樹『市原市番後台遺跡・明神台遺跡』(1982)(財)千葉県文化財センター
- (4) 同上
- (5) 山口直樹『皿郷田茂遺跡』(1984)(財)市原市文化財センター
- (6) 武田宗久ほか『上総 江子田金環塚』(1985)市原市教育委員会
- (7) 倉田芳郎ほか『千葉・南総中学遺跡』(1987)市原市教育委員会
- (8) 米田耕之助『沢遺跡』(1987)(財)市原市文化財センター
- (9) (6)に同じ。
- (10) 文献 33 に 1986 年時点のものが整理してある。参照されたい。
- (11) 須田勉氏の御教示による。
- (12) 田中清美氏の御教示による。尚、報告が近日中にされる予定である。





- BV s - 81 区土層説明
1. 黒色泥土。白色粘性土ブロックを多く含む遺物含層。
  2. 灰褐色シルト。
  3. 現耕作土層。



第12図 BVw-26区・BV s-81区および永田窯跡群出土遺物

表-1

## 永田・不入窯跡群 出土土器観察表(杯類)

( )内は残存値 単位:cm

挿図No.	名称	出土地点	口縁径	底部径	器高	高台径	高台高	胎土	色調	焼成	切離し技法	調整等	その他
8-1	杯	DIV y-0 区	14.8	11.0	2.6	-	-	白色針状物を含む。砂粒等は含まない	暗褐色	硬緻良好	欠損不明	底部外縁は、成形時の回転ナデ	遺存度 1/8程度。つくりはあまい
8-2	杯	DIV y-0 区	-	9.5	(1.9)	-	-	白色微粒の混入が目立つ	明褐色～小豆色	硬緻	回転糸切り離し技法	底部全面回転ヘラケズリ整形(R)整形下に切り離し痕跡が若干観察される	
8-3	杯	DIV y-0 区	-	8.5	(1.4)	-	-	黒色微粒の混入が多い	明褐色	良好	回転糸切り離し技法	底部全面回転ヘラケズリ整形(L)	遺存度 底部のみ1/4弱
8-7	高台付杯	DIV y-0 区	-	11.3	(1.4)	10.5	0.8	白色微粒を含む	灰色	良好硬緻	不詳(糸切りか)	底部全面回転ヘラケズリ整形(R)	遺存度 底部のみ1/4弱 高台部接地面に沈線状の整形痕が一条めぐる
8-8	高台付杯	DIV y-0 区	-	11.0	(2.0)	9.3	1.0	白色微粒を含む	灰色～白灰色	良好	不詳(糸切りか)	底部全面回転ヘラケズリ整形(R?)	遺存度 底部のみ1/2 内面に窯体が付着している
8-11	高台付杯	DIV y-0 区	19.6	-	(6.0)	-	-	白色微粒を多く含む	白灰色(内面) 灰色(外面)	良好	不明		遺存度 口縁部のみ1/4
9-15	杯	H II c-0 区	12.5	9.1	(3.4)	-	-	白色微粒を多く含む	白灰色 灰色(外面)	良好	欠損不明	底部回転ヘラケズリ整形(R)	小片(表A9-2) 口唇部回転ナデ整形の為、内面にかぶりあり
9-16	杯	H II c-0 区	12.4	9.6	3.2	-	-	白色微粒を多く含む	暗灰色	やや軟	不詳(糸切りか)	底部全面回転ヘラケズリ(R)	遺存度 1/5程度(表A9-4) 口唇部の回転ナデ整形明瞭
9-17	杯	H II c-0 区	12.1	6.4	3.7	-	-	白色微粒を若干含む	明褐色～白色	軟	不詳(糸切りか)	底部全面回転ヘラケズリ(?)	遺存度 1/6程度(表A-2) c f. 文献29 図7-25
9-18	杯	H II c-0 区	13.1	9.3	4.0	-	-	褐色微粒を多く含む	褐色～灰褐色	硬緻	不詳	底部全面回転ヘラケズリ(R)	遺存度 1/3程度(表A-2) c f. 文献29 図7-24 内外面に火燵、重ね焼きの痕が観られる
9-19	杯	H II c-0 区	14.2	9.8	4.0	-	-	白色微粒がほとんど含まれていない	明褐色～白褐色	非常に軟	不詳	底部全面回転ヘラケズリか?	ほぼ完形(表A-1) c f. 文献29 図7-23
9-20	杯	H II c-0 区	14.0	10.6	2.8	-	-	白色微粒と白色針状物とが若干含まれる	灰色	良好	不明	回転ヘラケズリ(R)	小片(表A9-3) 内外面に火燵がみられる重ね焼き痕明瞭
9-21	杯	H II c-0 区	11.5	-	(2.6)	-	-	白色微粒を含む	灰色	良好	不明	不明	小片(表A9-1) 内外面に火燵がみられる重ね焼き痕明瞭
9-22	杯	H II c-0 区	12.4	-	(2.6)	-	-	白色微粒を若干含む	白灰色	良好	不明	不明	遺存度 1/6程度(表A-2) 作りは丁寧である
9-23	杯	H II c-0 区	12.8	-	(3.3)	-	-	白色微粒を含む	灰褐色	軟	不明	不明	小片
9-24	杯	H II c-0 区	14.3	-	(3.6)	-	-	白色微粒を含む	灰色やや褐色がかっている	良好	不明	不明	遺存度 1/5程度(表A-2) つくりは薄手丁寧 口唇部に稜を有し、口縁上端に回転によるナデ整形が明瞭に入る 永田14号窯の製品に類似している
9-25	高台付杯	H II c-0 区	12.2	10.2	4.0	8.9	0.9	白色微粒を若干含む	やや褐色をおびた青灰色	硬緻	回転糸切り離し技法	底部全面回転ヘラケズリ(R?)	遺存度 1/2程度(表A-2) 内外面に火燵、外面に重ね焼きの痕が観られる c f. 文献29 図7-26
9-26	高台付杯	H II c-0 区	13.8	-	(3.0)	-	-	白色微粒を若干含む	白灰色	良好	不明	不明	(表A-6) 丁寧なつくりである底部については、高台貼付部で剥落し欠損している
10-30	高台付杯	H II c-0 区	17.7	-	(3.5)	-	-	白色微粒を含まない	白色～白褐色	軟	不明	不明	小片(表A-2) 口唇部に稜を有している
10-31	高台付杯	H II c-0 区	17.1	-	(5.4)	-	-	白色微粒を含む	灰色	良好	不明	不明	(表A-2)

表-2

## 永田・不入窯跡群 出土土器観察表(杯類)

( )内は残存値 単位:cm

挿図No.	名称	出土地点	口縁径	底部径	器高	高台径	高台高	胎土	色調	焼成	切離し技法	調整等	その他
10-32	高台付杯	H II c - 0 区	-	12.7	(2.7)	11.6	1.0	白色微粒・ 白色針状物 を含む	白褐色	やや軟	回転糸切離 し技法	底部外周部回転 ヘラケズリ調整 底部中心には糸 切り痕	遺存度 底部から体部下半 1 /3 (表A-2)
10-36	杯	G II d - 79 区	12.3	9.4	3.4	-	-	白色微粒を 多く含む	灰白色～灰 色	良好	回転糸切離 し技法	底部回転ヘラケ ズリ調整(R)中 心に若干の糸切 り痕を残す	ほぼ完形(永田10号窯表採) 内面にのみ火燻がみられる 体部に成形痕を有している
10-37	杯	G II d - 79 区	12.9	9.6	3.1	-	-	白色微粒を 若干含む	灰色	良好	回転糸切離 し技法	底部回転ヘラケ ズリ調整(R)調 整の仕方は雑。 中心に若干の糸 切り痕を残す	底部は完存体部は 1 / 6 程度 内外面に火燻痕が観られる (永田10号窯表採)
10-38	杯	G II d - 79 区	12.6	9.5	3.4	-	-	白色微粒を 多く含む	灰色～暗灰 色	非常に良 い硬緻	不詳 切り離し痕 跡は、整形 によって全 く観察され ない	底部全面回転ヘ ラケズリ調整	底部ほぼ完存体部は 1 / 6 程 (永田10号窯表採) ミコミに火燻痕が観られる
10-39	杯	G II d - 79 区	12.6	9.3	3.4	-	-	白色微粒・ 黒色微粒を 含む	淡灰色	良好	不明	底部回転ヘラケ ズリ(R)	1 / 7 弱(永田10号窯表採) 中心部に成形痕を有している
10-40	杯	G II d - 79 区	12.1	8.5	2.6	-	-	白色微粒・ 白色針状物 を含む (10-42)と 同じ	灰白色	やや軟 (多孔質)	不詳	回転ヘラケズリ 調整(R)	遺存度 1 / 4 程度 (永田10号窯表採)
10-41	杯	G II d - 79 区	13.9	9.0	3.2	-	-	白色微粒を 含む	灰色	良好 硬緻	不詳	回転ヘラケズリ 調整(R)	遺存度 1 / 4 程度 (永田10号窯表採) 内・外面に火燻痕が観られる つくりが丁寧である (永田10号窯表採)
10-42	杯	G II d - 79 区	13.4	11.3	3.7	-	-	白色微粒・ 白色針状物 を含む (10-40)と 同じ	白灰色	良好	不詳	底部全面回転ヘ ラケズリ(R)	
10-43	杯	G II d - 79 区	13.3	9.0	3.2	-	-	白色微粒を 含む	灰褐色	良好	不明	底部回転ヘラケ ズリ調整(R?)	小片 1 / 7 程度(永田10号窯 表採)焼ひづみがみられる
10-44	杯	G II d - 79 区	14.6	11.4	3.3	-	-	白色微粒・ 白色針状物 を多く含む	灰色～灰白 色	良好	不明	底部回転ヘラケ ズリ調整(R?)	遺存度 1 / 5 程度 (永田10号窯表採)
10-45	杯	G II d - 79 区	11.5	8.0	4.0	-	-	砂粒等の混 入は認めら れない	灰色	良好 硬緻	不詳	底部全面回転ヘ ラケズリ(R) 成形痕を底部に 残している	遺存度 1 / 2 強 (永田10号窯表採)
10-46	高台付杯	G II d - 79 区	12.4	8.1	3.9	8.0	0.6	白色微粒は 含むが、砂 粒等の混入 は認められ ない	灰白色	良好 硬緻	不詳	底部全面回転ヘ ラケズリの後、 高台部貼付	底部は完存。体部は 1 / 5 程 度 (永田10号窯表採)
10-47	高台付杯	G II d - 79 区	17.0	11.8	6.6	9.7	1.0	白色微粒を 含む	灰色	良好 硬緻	回転糸切離 し技法	底部外周回転ヘ ラケズリ調整 の後、高台部貼付	(永田10号窯表採)
10-48	高台付杯	G II d - 79 区	15.4	-	(5.3)	-	-	白色微粒を 含む 白色針状物 を若干含む	灰色～暗灰 色	良好 硬緻	不明	不明	(永田10号窯表採)
11-49	杯 (土師器)	D IV c - 26 区	12.8	6.2	4.0	-	-	赤褐色粒・ 白色微粒・ 白色針状物 を含む	褐色	良好	-	外面は手持ちヘ ラケズリ調整。 内面はミガキが 施されている	遺存度 1 / 2 程度 (図版7-42) D IV c - 26 - 0・D IV c - 36 - 0
11-50	杯	D IV c - 26 区	11.4	-	(3.2)	-	-	白色微粒を 含む	赤褐色～小 豆色	良好	不明	不明	遺存度 1 / 2 程度 (図版7-43) D IV c - 26 - 52 - 5・- 48
11-51	杯	D IV c - 26 区	12.7	10.0	3.3	-	-	白色微粒を 含む。砂粒 は含まない	灰白色～白 褐色	良好	不詳	底部全面回転ヘ ラケズリ調整	(図版8-49)

表-3

## 永田・不入窯跡群 出土土器観察表(杯類)

( )内は残存値 単位:cm

挿図No.	名称	出土地点	口縁径	底部径	器高	高台径	高台高	胎土	色調	焼成	切離し技法	調整等	その他
11-52	杯	DIV c-26区	12.3	8.5	3.4	-	-	白色微粒・ 黒色微粒を 含む 白色針状物 を若干含む	やや緑がか った灰色	良好	不詳 糸切り? へら切り? 2.5回転	全面回転ヘラケ ズリ調整か? (L) ※左回転で、外 側から中心に向 かって削られて いる	一部欠損・ほぼ完形 内・外面に火傷が観られる (図版7-45)
11-53	杯	DIV c-26区	13.3	8.9	3.9	-	-	白色微粒・ 白色針状物 を含む	灰色	良好 硬緻	不詳	全面回転ヘラケ ズリ調整(R)	内・外面に火傷が観られる (図版7-44)
11-54	杯	DIV c-26区	13.6	-	(3.5)	-	-	白色微粒を 含む	灰色	良好	不明	不明	底部欠損 内面にのみ火傷が観られる
11-55	杯	DIV c-26区	13.2	8.3	3.8	-	-	白色微粒と 白色針状物 を含む 赤褐色微粒 を若干含む	淡灰色	良好	不明	底部回転ヘラケ ズリ(R)	内・外面に火傷が観られる
11-56	杯	DIV c-26区	13.5	11.4	3.4	-	-	黒色微粒を 含む 砂粒は含ま ない 白色針状物 を含む	灰白色	良好	不詳	底部全面回転ヘ ラケズリ(R)	比較的丁寧なつくり (図版8-50)
11-57	杯	DIV c-26区	13.7	8.8	3.9	-	-	黒色微粒・ 白色微粒・ 白色針状物 を含む 少量だが、 銀ウンモ片 も観察され る	白灰色	やや軟	不詳	底部は、内側か ら外側へむけて 1回転で全面ヘ ラケズリ調整	ほぼ完形 やや焼ゆがみが観られる (図版7-46)
11-58	杯	DIV c-26区	13.5	9.0	4.2	-	-	白色微粒を 含む	褐色	やや軟	回転糸切り 離し技法	底部切離し後、 無調整	内面に火傷が観られる (図版7-47)
11-59	杯	DIV c-26区	13.5	9.0	3.4	-	-	白色微粒を 含む	白灰色	やや軟	回転糸切り 離し技法	底部外周は、内 側から外へ回転 ヘラケズリ調整 中心部に糸切り 痕を残す	黒色粒の斑点が内外面にみら れ、尾をひいている 胎土中にワラ状のものが観ら れる(図版8-48) 火傷は観られない
11-60	高台付杯	DIV c-26区	13.7	11.6	4.5	10.1	0.9	白色微粒・ 白色針状物 を含む砂粒 は認められ ない	灰色	良好 硬緻	不詳	底部全面回転ヘ ラケズリの後、 高台部貼付	内面にのみ火傷が観られる (図版8-52)
11-61	高台付杯	DIV c-26区	13.1	10.4	4.0	7.9	0.8	砂粒等の混 入は全く認 められない	白色	軟	不詳	回転ヘラケズリ の後、高台部を 貼付	完形 丁寧なつくりである
11-62	高台付杯	DIV c-26区	13.5	10.7	4.0	9.0	0.7	白色微粒お よび銀ウン モ粒を若干 含む	灰白色	軟	不詳	外から内へむけ て、底部回転ヘ ラケズリ調整を 施した後、高台 部を貼付してい る(R)	ほぼ完形 (図版8-51)
11-63	高台付杯	DIV c-26区	12.7	10.2	4.4	8.8	0.9	白色微粒を 含む	白灰色	良好	不詳	底部全面回転ヘ ラケズリの後、 高台部を貼付し ている(R)	外面に火傷が観られる (図版8-53)
11-66	高台付杯	DIV c-26区	16.7	12.2	6.5	10.9	1.1	白色微粒を 含む	灰色～暗灰 色	良好 硬緻	不詳	底部全面回転ヘ ラケズリ後、高 台部を貼付する 貼付時に全面ナ デ整形を施して いる(R?)	ほぼ完形 内・外面に火傷が観られる 口唇部は、明瞭に整形されて いる (図版9-56)
11-67	高台付杯	DIV c-26区	17.0	12.4	6.5	11.7	1.0	白色微粒を 含む	やや青味が かった灰色	良好	回転糸切り 離し技法	底部外周回転ヘ ラケズリ調整 中心部に糸切り 痕を残す	(図版9-57)

表-4

## 永田・不入窯跡群 出土土器観察表(蓋類)

( )内は残存値 単位:cm

挿図No.	名称	出土地点	最大径	端部径	内径	蓋高	つまみ高	つまみ径	胎土	色調	焼成	その他
8-4	杯類蓋	DIV y-0区	14.9	14.5	13.6	(1.7)	-	-	黒色微粒・白色針状物を含む	白灰色	良好	遺存度 1/3程度 外面の回転ヘラケズリ調整は(R)端部まではおよんでいない
8-5	杯類蓋	DIV y-0区	13.9	13.3	13.0	(1.5)	-	-	黒色微粒・白色微粒を含む	白灰色	良好	小片 外面の回転ヘラケズリ調整は(R)端部まではおよんでいない
8-6	杯類蓋	DIV y-0区	15.7	15.7	14.6	(1.4)	-	-	白色微粒を含む	白灰色	良好	小片 外面の回転ヘラケズリ調整は、端部までおよんでいない
8-10	杯類蓋	DIV y-0区	16.6	-	15.5	(2.9)	-	-	白色微粒を含む	灰色～暗灰色	良好・硬緻	遺存度 1/4程度 外面の回転ヘラケズリ調整は、高い位置までで止まっている
10-27	杯類蓋	HII c-0区	16.4	15.8	15.4	(1.8)	-	-	黒色微粒・白色微粒を多く含む 白色針状物が若干観察される	灰色	良好	外面のヘラケズリ調整は、遺存範囲には観察されない(表A-2) 蓋表面がザラついている
10-28	杯類蓋	HII c-0区	17.5	17.0	16.4	(1.3)	-	-	黒色微粒・白色微粒を多く含む	灰色	良好	小片 外面の回転ヘラケズリ調整は、端部におよんでいない 回転方向不詳(R)か(表A-7)
10-29	杯類蓋	HII c-0区	18.2	17.9	17.0	(2.6)	-	-	白色微粒を多く含む	灰色～暗灰色	良好	外面の回転ヘラケズリ調整は(R)調整は端部におよんでいない(表A-9)
11-64	杯類蓋	DIV c-26区	(15.5)	(15.0)	(14.0)	(4.5)	1.5	2.3	白色微粒を含む	灰色	良好	ほぼ完形ただし焼歪みが著しい 内面外周部に自然釉の付着がみられる(図版9-62)
11-65	杯類蓋	DIV c-26区	17.7	17.3	16.8	4.4	1.9	2.4	白色微粒を含む	灰色	良好・硬緻	2/3程度 内面に火跡がみられる 外面のヘラケズリは(R)端部までおよんでいない(図版9-63)
12-70	壺鉢類蓋	DIV y-43区	(7.7)	-	-	(2.1)	1.2	1.7	白色微粒を含む	灰白色	良好・硬緻	小型鉢底部附着
12-71	壺鉢類蓋	DIV y-34区	10.3	9.9	9.2	3.3	1.1	1.9	白色微粒を含む	灰色	良好	
12-72	壺鉢類蓋	DIV y-61区	9.9	9.5	8.8	3.3	1.1	1.9	白色微粒を含む	灰色	良好	
12-75	壺鉢類蓋	DIV y-0区	8.1	7.9	7.2	(1.1)	-	-	白色微粒を含む	灰白色	良好	
12-76	壺鉢類蓋	DIV p-0区	8.9	8.0	7.4	2.9	1.0	0.9	黒色微粒・白色微粒・白色鉢状物を含む	灰色	良好・硬緻	完形(不入窯灰原表採)外面の回転ヘラケズリ調整は(R)回転で、端部まで全面に施されている
12-77	壺鉢類蓋	DIV x-98区	8.8	8.5	8.0	2.3	1.3	1.3	白色微粒を若干含む	灰色	良好・硬緻	

表-5

## 永田・不入窯跡群 出土土器観察表(盤・皿類)

( )内は残存値 単位:cm

挿図No	名称	出土地点	口縁径	底部径	器高	胎土	色調	焼成	切離し技法	調整等	その他
8-12	皿	DIV y-0区	15.7	5.4	2.9	白色微粒・黒色微粒を多く含む	灰色	良好・硬緻	不詳	体部下半に至るまで、外面を(R)回転の回転ヘラケズリで調整している	遺存度 口縁部1/4 底部1/3 外面に火罨が親られる
8-13	皿	DIV y-0区	17.7	-	3.6	白色微粒・黒色微粒を多く含む	灰色	良好・硬緻	不明	体部下半に至るまで、外面を(R)回転のヘラケズリで調整している	遺存度 1/4程度 内面は、R回転によるナデ整形が施されている 窯壁付着あり
8-14	盤	DIV y-0区	18.8	15.3	2.3	白色微粒を含む	白灰色	良好	不明	底部回転ヘラケズリ整形を施している	
10-33	皿	H II c-0区	11.3	5.8	2.1	白色微粒・白色針状物を含む	褐色	やや軟	回転糸切り離し技法	切り離し後の調整を底部に施していない	内・外面に火罨が親られる(表A-9) c f. 文献29 図7-27
10-34	皿	H II c-0区	22.0	14.9	(2.2)	白色微粒・黒色微粒を多く含む	白灰色	良好	不明	体部下半に至るまで、外面を(R)回転のヘラケズリで調整している	口縁部内面に沈線が一条めぐっている(表A-8)
11-68	盤	DIV c-26区	18.5	8.1	2.4	白色微粒・白色針状物を多く含む 黒色微粒が回転ヘラケズリによって尾をひくように観察される	白灰色	良好	不詳	体部下半に至るまで、外から内にむけて(R)で回転ヘラケズリを施している	内・外面に火罨が親られる 内面は、回転ナデによって、整形が施されている(図版9-60)

表-6

## 永田・不入窯跡群 出土土器観察表(鉢)

( )内は残存値 単位:cm

挿図No	名称	出土地点	口縁径	底部径	器高	胎土	色調	焼成	切離し技法	調整等	その他
10-35	鉢	H II c-0区	8.8	6.0	7.6	白色微粒・黒色微粒・白色鉢状物を含む	白褐色	やや軟	不詳	底部全面回転ヘラケズリ(R)	底部と体部との間に、輪積み痕が親られる 体部下半には、回転ヘラケズリ整形が施されているが、端部は手持ちヘラケズリである(表A-9) c f. 文献29 図7-28
12-73	鉢	DIV y-0区	8.8	6.5	6.4	白色微粒を含む	青灰色	良好・硬緻	回転糸切り離し技法	底部全面回転ヘラケズリ(R)	
12-74	鉢	DIV y-33区	8.6	5.3	7.8	白色微粒を含む	灰白色外面に自然釉付着	良好	不明	体部下端回転ヘラケズリ整形(R)	

## XII おわりに

昭和 61 年度および昭和 62 年度に実施した永田・不入窯跡の確認調査は、加茂地区のほ場整備に先行して実施された水田部分の調査であった。その目的は、周知されてきた窯跡群の周辺に未知の窯跡を確認することであり、保存することであった。この意味では、永田窯跡群側に二群の灰原を確認したことで、その目的を十分に果たし得たと思う。

また、ほ場整備を実施する千葉縣市原土地改良事務所の担当者や、地元加茂地区土地改良区の方々も、調査に対して常に好意的であり、紳士的に対応して下さった。厳冬の中の作業は辛く、地震にも見舞われたが、気持ちの良い仕事であったと回顧している。心から、謝意を表したい。

さて、本書では確認された二ヶ所の窯跡群について、その遺物を十分に報告することができなかった。これはすべて、報告者の怠慢によるところである。本書を手にする研究者の方々には、不満の多いところであろう。

しかし、千葉県下における須恵器生産遺跡の研究課題は、その学史的経験において、あともどりのない資料の蓄積が急望されているのであって、安易に「白紙状態」と評せられるべきものであってはならないと信じている。

個別的な問題として、今回の調査あるいは本書を取り上げるならば、第 1 トレンチ・第 3 トレンチ各調査区の出土遺物については、接合率が非常に悪く、分類を困難にしている。従って、それぞれにおける窯本体の基数や位置の想定は、灰原資料の分類によるデータの積み重ねから導き出したものではなく、ボーリングステッキ等による現地踏査の結果によっている。今後、整理作業の過程で実施してきた分類の結果を咀嚼し、踏査結果との比較を実施してゆくこととしたい。

尚、巻末に、千葉県下の須恵器生産遺跡関係文献の一覧を付した。活用されたい。

### 須恵器生産遺跡関係文献一覧（太字は窯跡の調査報告・資料紹介）

- 1927 年
01. 谷中国樹 「第二編 第二章 原始時代又古墳時代 第一節 遺跡」『君津郡誌』上巻 千葉県君津郡教育會 P. 273 ~ 341
- 1964 年
02. 藤原文夫 「永田雑記」『南総郷土文化研究会誌』第三号 南総郷土文化研究会 P. 37 ~ 73
- 1967 年
03. 倉田芳郎・坂詰秀一 「III 古代・中世における手工業の発達 1 窯業 二. 古代・中世窯業の地域的特質(1)東北・関東」『日本の考古学』VI 歴史時代(上)河出書房新社 P. 111 ~ 129
04. 大川 清 「木更津矢那瓦窯址」『古代』第 49・50 合併号 早稲田大学考古学会 P. 126 ~ 134
- 1976 年
05. 大川 清ほか 『千葉縣市原市 永田、不入須恵窯跡調査報告書』千葉県教育委員会
06. 須田 勉 『坊作遺跡発掘調査概要』上総国分寺台遺跡調査団 千葉縣市原市教育委員会
- 1977 年
07. 須田 勉 「坊作遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概要 IV』上総国分寺台遺跡調査団 P. 32 ~ 33
08. 石田広美ほか 『山田水呑遺跡』山田水呑遺跡発掘調査団
09. 松村恵司 「出土土器の分類と編年」『山田水呑遺跡』山田水呑遺跡発掘調査団 P. 775 ~ 809
- 1978 年
10. 酒井清治 「遺跡周辺の表採遺物 石川窯址」『千葉・南総中学遺跡』市原市教育委員会 P. 294 ~ 299
11. 大川 清ほか 「千葉縣市原市 永田、不入須恵窯跡」『国史館大学考古学研究室報告 乙種 第 4 冊』国史館大学考古学研究室
- 1979 年
12. 坂詰秀一 「窯跡出土資料による関東地方須恵器の編年」『立正大学人文学研究所年報』立正大学人文学研究所 P. 13 ~ 17
- 1981 年
13. 国平健三 「相模国の奈良・平安時代集落構造(上)」『神奈川考古』第 12 号 神奈川考古同人会 P. 65 ~ 104
14. 酒井清治 「房総における須恵器生産の予察(Ⅰ)」『史館』第 13 号 市川ジャーナル社 P. 1 ~ 24
15. 篠原 正 『千葉県印旛郡富里町埋蔵文化財分布地図』富里町教育委員会

- 1982年
16. 佐久間 豊 「9世紀代須恵器研究の現状—千葉県—」『シンポジウム — 関東地方における9世紀代の須恵器と瓦 — 』立正大学文学部考古学研究室 P. 49～55
- 1983年
17. 土屋潤一郎 「八日市場市吉田所在の須恵器窯について」『研究連絡誌 第3号(財)千葉県文化財センター P. 5～9
18. 倉田義広 「千葉市内の平安時代窯跡について」『貝塚博物館紀要 第10号 千葉市加曾利貝塚博物館 P. 1～20
19. 宇津川 徹 「窯跡から出土した須恵器(胎土)の鉱物学的分析について」『貝塚博物館紀要 第10号 千葉市加曾利貝塚博物館 P. 21～40
20. 夷隅川流域史研究会 『東前横穴古墳群』
21. 佐久間 豊 「千葉県における奈良・平安時代土器の様相(1)」『史館 第14号 市川ジャーナル社 P. 86～101
22. 服部敬史 「奈良・平安時代の土器生産について」『史館 第15号 (株)弘文社 P. 140～156
23. 史館同人ほか 『シンポジウム資料集 房総における奈良・平安時代の土器』史館同人・市立市川考古博物館
- 1984年
24. 佐久間 豊・井口 崇 「千葉県市原市石川窯址における表面採集の須恵器」『史館 第16号(株)弘文社 P. 125～135
25. 史館同人ほか 「シンポジウム収録 房総における奈良・平安時代の土器」『史館 第17号(株)弘文社 P. 94～139
26. 坂詰秀一ほか 『南河原坂第4遺跡 調査概要』千葉市土気地区遺跡調査会
27. 奥田正彦 「千葉県内出土須恵器・埴輪・瓦の分析試料」『千葉県文化財センター研究紀要 第8号 (財)千葉県文化財センター P. 157～187
28. 三辻利一 「千葉県内出土須恵器・埴輪・瓦の胎土分析」『千葉県文化財センター研究紀要 第8号 (財)千葉県文化財センター P. 239～267
- 1985年
29. 山口直樹 『永田、不入窯跡』市原市教育委員会
30. 高橋康男 「草刈型土器」『千葉県市原市 草刈遺跡』(財)市原市文化財センター P. 117～120
- 1986年
31. 宮内勝己 「印旛沼周辺における8世紀代の須恵器」『印旛郡文化財センター研究紀要 第1号(財)印旛郡文化財センター P. 115～134
32. 寺内博之 「印旛郡富里町吉川窯跡出土の土器」『印旛郡文化財センター研究紀要 第1号 (財)印旛郡文化財センター P. 135～142
33. 須田 勉ほか 「IV. 窯業」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会 P. 81～94
34. 倉田義広 「IV. 窯業 須恵器窯跡」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会 P. 84～85
35. 佐久間 豊 「房総をめぐる奈良・平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題」『研究紀要 第10号 (財)千葉県文化財センター P. 339～354
36. 立教大学考古学研究会 『千葉県岬町埋蔵文化財分布地図』
- 1987年
37. 房総歴史考古学研究会 『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会
38. 高橋康男 「IV 生産遺跡 1 上総永田・不入窯」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会 P. 261～267
39. 倉田義広 「IV 生産遺跡 2 下総の須恵器窯」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会 P. 268～281
40. 田所 真 「II 上総国 1 市原市坊作遺跡(旧市原郡)」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会 P. 9～38
41. 笹生 衛 「V コメント 1 安房・上総に対するコメント」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会 P. 283～297
42. 郷堀英司 「V コメント 2 下総に対するコメント」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会 P. 298～312
43. 服部敬史 「東国における奈良時代前半の須恵器生産とその意義」『信濃』第39巻第7号信濃史学会 P. 1～25
44. 佐久間 豊 「房総におけるロクロ土師器生産—シンポジウム房総における歴史時代土器の研究を顧みて」(1986)『史館 第19号(株)弘文社 P. 89～106
45. 山口直樹 「3. 大和田遺跡」『第2回 市原市文化財センター遺跡発表会要旨』—昭和61年度—(財)市原市文化財センター P. 8～9
46. 立教大学考古学研究会 『千葉県夷隅町埋蔵文化財分布地図』
- 1988年
47. 奥田正彦 『市原市石川須恵器窯跡確認調査報告書』(財)千葉県文化財センター
48. 立教大学考古学研究会 『千葉県夷隅郡大原町埋蔵文化財分布地図』
49. 水口由紀子 「分布調査の成果 ⑤ 奈良・平安時代」『千葉県夷隅郡大原町埋蔵文化財分布地図』立教大学考古学研究会 P. 61



# 写真図版

1. 永田・不入窯跡群遠景(東側から)
2. 永田・不入窯跡群遠景(北側から)
3. 土層堆積状況
4. 永田窯跡No.1 トレンチ内遺物出土状況
5. DIV c - 26区出土遺物



1



2



3



4



5

6. 永田・不入窯跡群周辺の地形(東側から)
7. 永田窯跡No.1 トレンチ
8. 永田窯跡No.3 トレンチ



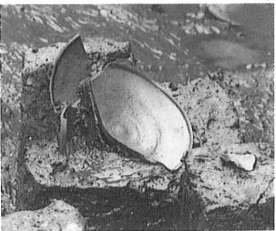
6



7



8



9. 永田・不入窯跡群遠景(北側から)
10. 永田・不入窯跡群遠景(フジヤマから)
11. 不入窯跡群遠景(対岸より)
12. 不入窯跡群近景(西側から)
13. 永田窯跡群遠景
14. 永田窯跡群近景
15. 窯跡群の位置関係(東側から)



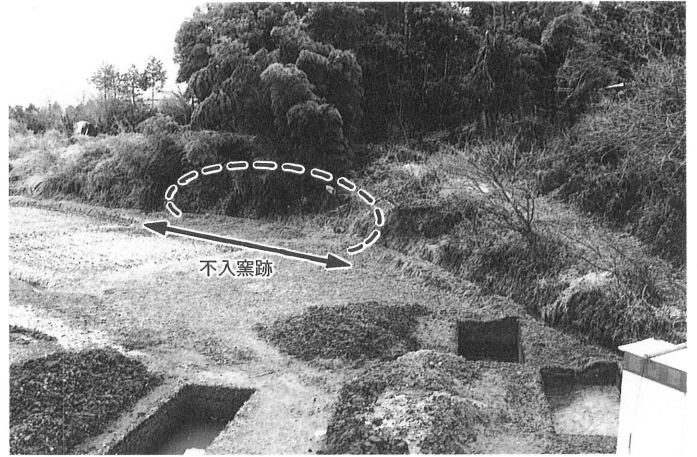
9



10



11



12



13



14



15

16. 永田窯跡群No.1 トレンチ遠景
17. 永田窯跡群No.1 トレンチ遺物出土状況(西側)
18. 永田窯跡群No.1 トレンチ遺物出土状況(中央)
19. 永田窯跡群No.1 トレンチ遺物出土状況(東側)
20. 永田窯跡群No.1 トレンチ物原下面検出状況(1)
21. 永田窯跡群No.1 トレンチ物原下面検出状況(2)
22. 遺物堆積状況
23. 遺物堆積状況(近景)





16



17



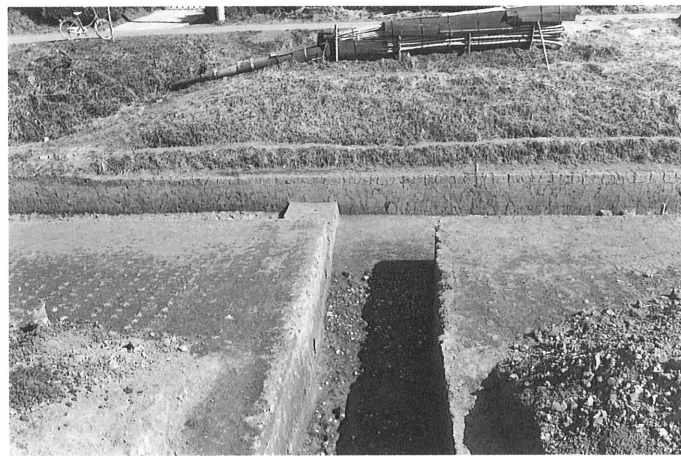
18



19



20



21



22



23

24. 永田窯跡群No.3 トレンチ近景(西側)
25. 永田窯跡群No.3 トレンチ近景(中央)
26. 永田窯跡群No.3 トレンチ近景(東側)
27. 永田窯跡群No.3 トレンチ遺物出土状況(1)
28. 永田窯跡群No.3 トレンチ遺物出土状況(2)
29. 永田窯跡群No.3 トレンチ遺物出土状況(3)
30. 遺物堆積面土層観察
31. 永田窯跡群No.3 トレンチ物原下面検出状況



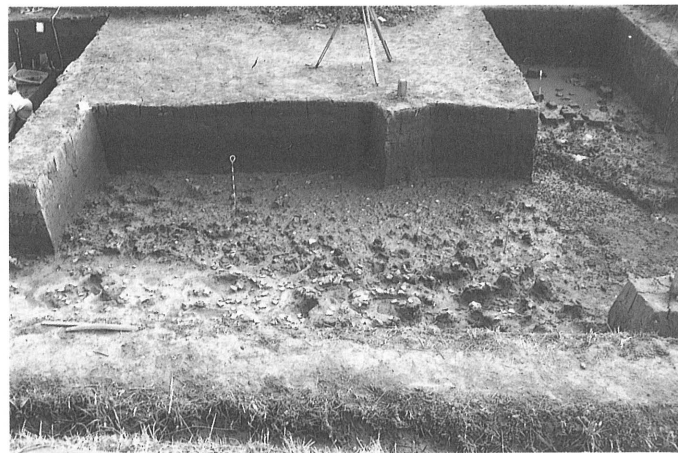
24



25



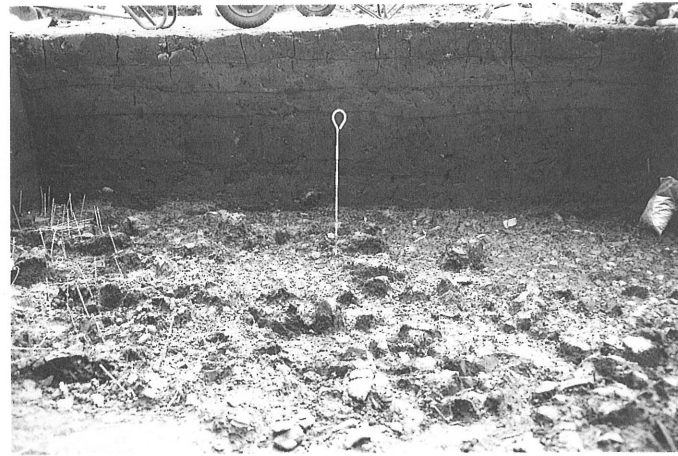
26



27



28



29



30



31

32. E II s - 35 区拡張調査区溝状遺構検出状況
33. E II s - 35 区土層
34. C IV区～D IV区調査状況
35. D IV c - 26 区遺物出土状況
36. B V区・B VI区調査状況(東側上空から)
37. B V w - 55 区溝状遺構検出状況(北から)
38. B V s - 81 区調査状況(東から)
39. B V t - 71 区調査状況(西から)



32



33



34



35



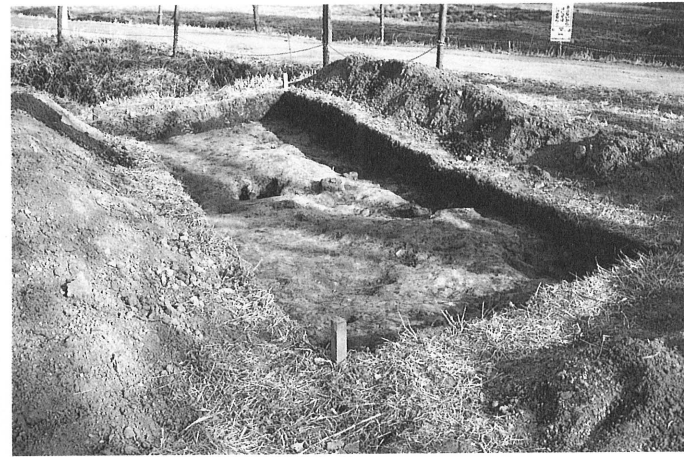
36



37



38



39

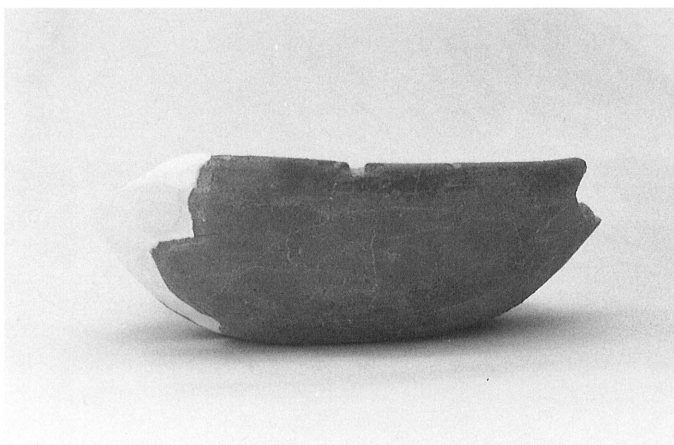
40. F II b - 51 区出土
41. F II b - 51 区出土
42. DIV c - 26 区出土(第 11 图 49)
43. DIV c - 26 区出土(第 11 图 50)
44. DIV c - 26 区出土(第 11 图 53)
45. DIV c - 26 区出土(第 11 图 52)
46. DIV c - 26 区出土(第 11 图 57)
47. DIV c - 26 区出土(第 11 图 58)



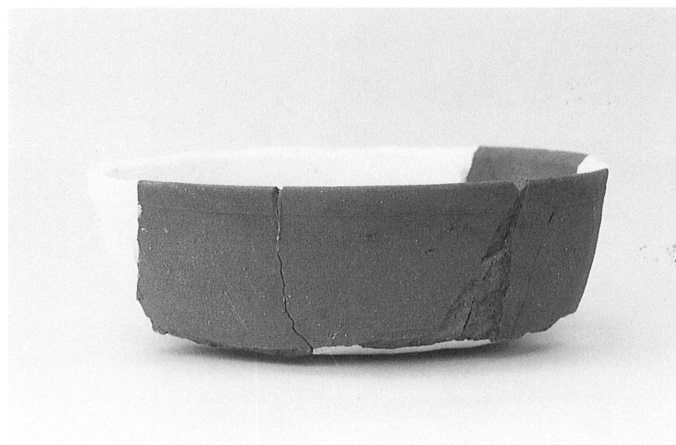
40



41



42



43



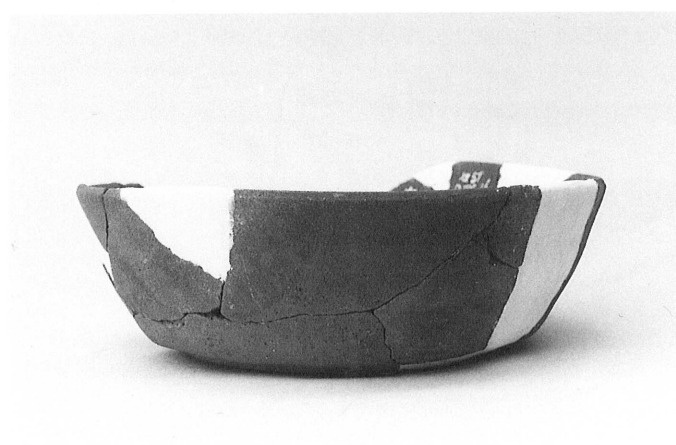
44



45



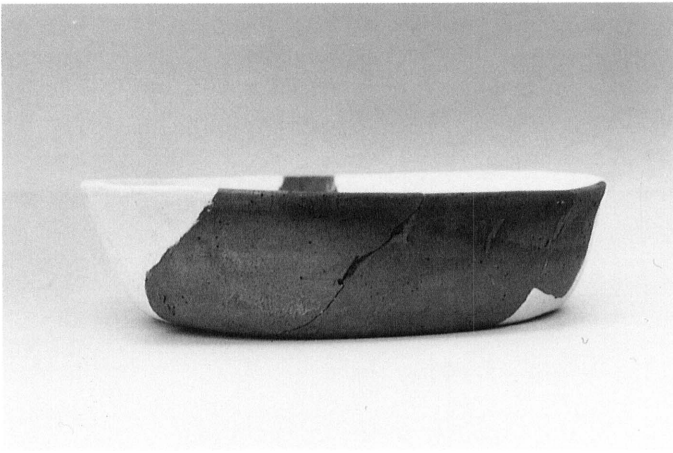
46



47

48. DIV c - 26 区出土(第 11 图 59)
49. DIV c - 26 区出土(第 11 图 51)
50. DIV c - 26 区出土(第 11 图 56)
51. DIV c - 26 区出土(第 11 图 62)
52. DIV c - 26 区出土(第 11 图 60)
53. DIV c - 26 区出土(第 11 图 63)
54. H II c - 83 区出土
55. H II c - 83 区出土

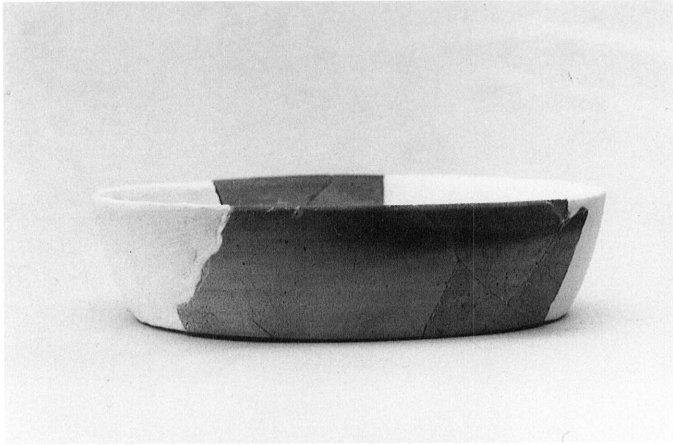




48



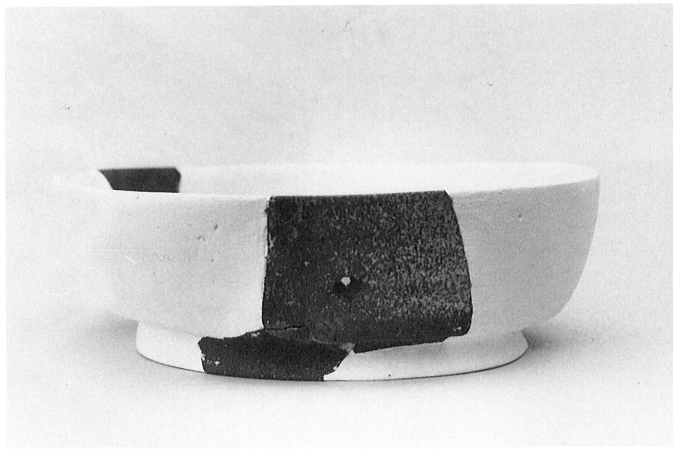
49



50



51



52



53



54



55

56. DIV c - 26 区出土(第 11 図 66)
57. DIV c - 26 区出土(第 11 図 67)
58. DIV c - 26 区出土
59. G II d - 79 区表採(永田 10 号窯)
60. DIV c - 26 区出土(第 11 図 68)
61. 左:No. 3 トレンチ調査区出土  
中央:DIV y - 42 区出土  
右:DIV y - 34 区出土
62. DIV c - 26 区出土(第 11 図 64)
63. DIV c - 26 区出土(第 11 図 65)



56



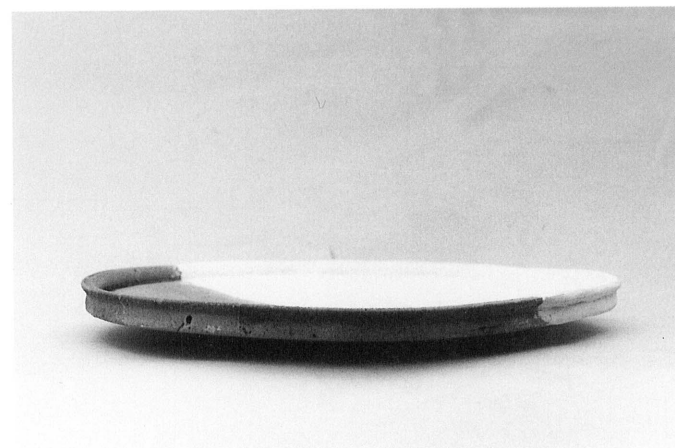
57



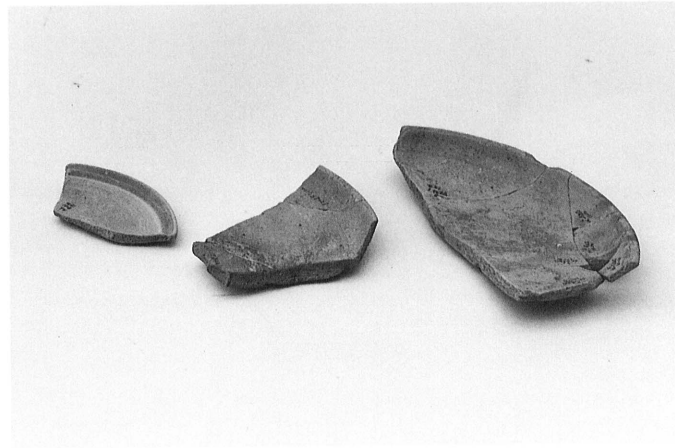
58



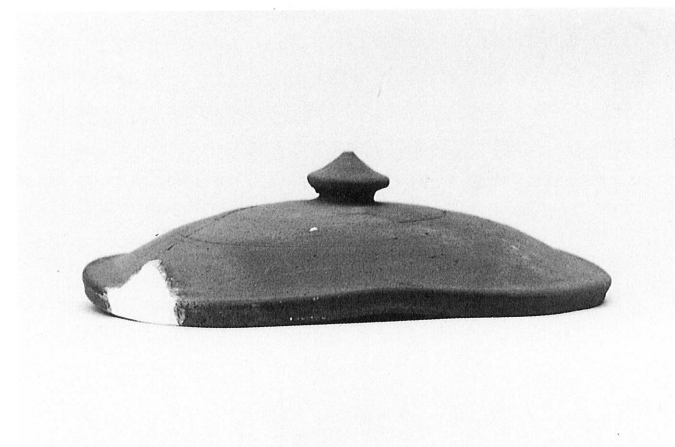
59



60



61

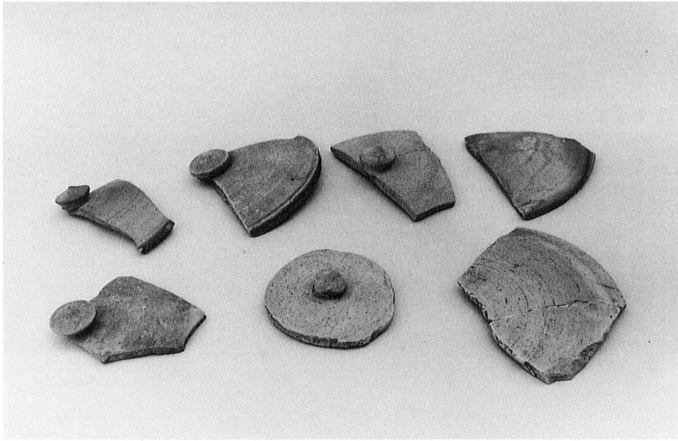


62

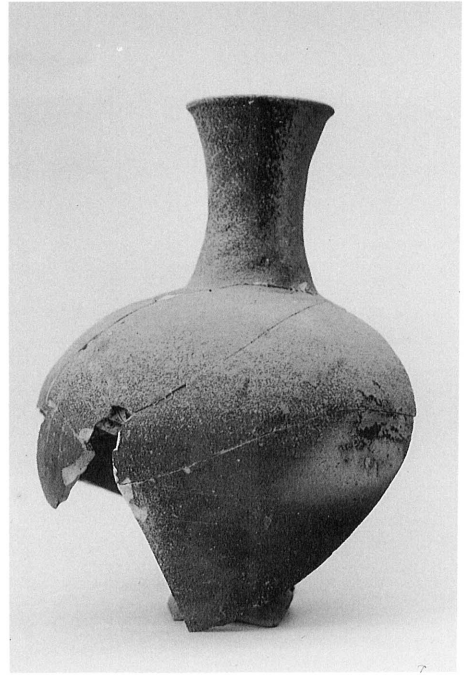


63

64. No.1 トレンチ調査区出土
65. H II c - 83 区出土
66. 同上(口縁部)
67. H II c - 56 区・H II g - 19 区出土
68. E IV d - 27 区出土(No.1 トレンチ内)
69. H II c - 53 区出土



64



65



66



68



67



69

70. No. 3 トレンチ調査区出土
71. DIV y - 27 区出土
72. No. 1 トレンチ調査区出土
73. DIV y - 43 区出土
74. 上段左: DIV y - 61 区出土  
上段右: DIV y - 43 区出土  
下段左: DIV y - 43 区出土  
下段右: No. 2 トレンチ調査区出土
75. 上段左: No. 1 トレンチ調査区出土  
上段右: No. 3 トレンチ調査区出土  
下段左: No. 2 トレンチ調査区出土  
下段右: G II x - 18 区表採
76. G II j - 41 区表採
77. No. 2 トレンチ調査区出土(75. 下段左裏面)



70



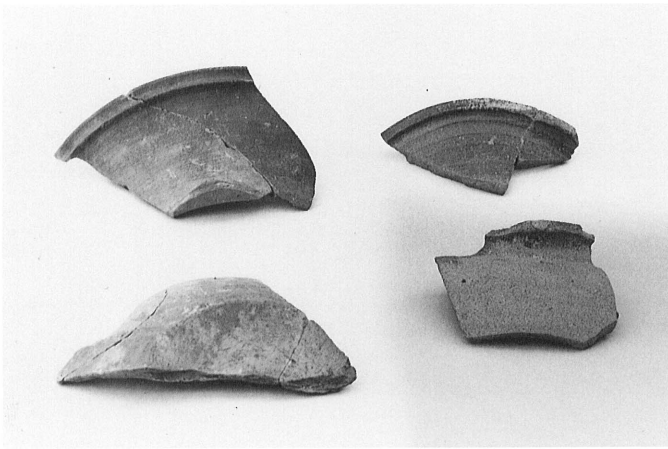
71



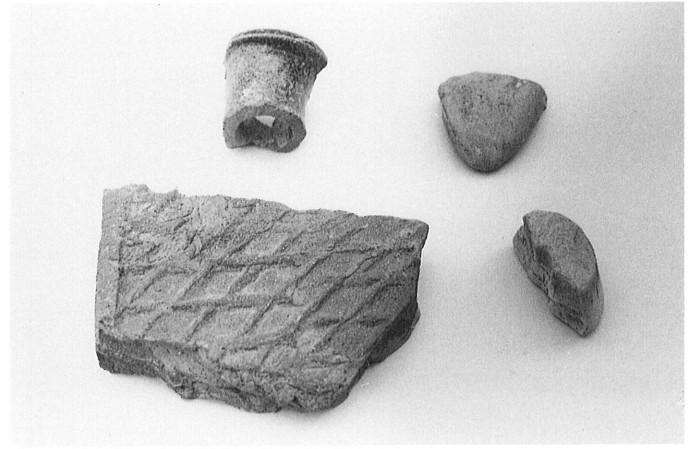
72



73



74



75



76



77

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第31集

## 市原市 永田・不入窯跡

平成元年3月20日 印刷  
平成元年3月25日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 財団法人 市原市文化財センター  
千葉県市原市馬立817番地  
T E L 0436(95)2755

印 刷 三 陽 工 業 株 式 会 社  
市原市五井5510-1番地